0038548000

0038548-000

60－887

女の肉的研究

羽太鋭治・著

思潮社

昭和2

AGG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

醫學博士 羽太鋭治著

女の肉的研究

東京 思潮社發行

60-887

女の肉的研究

目次

序文（著者の人となり）

緒論

第一節　男女性の生物學的觀察……一

第一項　男と女……一

第二項　男女性の起源……三

第三項　高等生物の雌雄性……五

第二節　女性の社會史觀的關係……六

第一項　原始時代の女性……六

第二項　中世期の女性……九

第三項　近代の女性……一〇

第三節　思想家の女性觀……一二

第四章　性慾の對象としての女性……一八
第五章　性慾と女の美貌、肉的研究の範圍……三三
第一　女性の體格に關すること……四〇
一　外形
二　身長
三　體重
第二　女性の發育及び成長に關すること……四〇
第三　女性の體質に關すること……四一
一　體質
二　素性
三　女らしい女
四　男らしい女
五　虚榮の女
六　新らしい女
第四　女性の發情期に關すること……四二

第五　月經に關すること……四二
一　初經期
二　終經期
三　月經異常
第六　女性の生殖器に關すること……四三
一　外生殖器
二　内生殖器
第七　女性の皮膚に關すること……四四
一　皮膚
二　體毛
第八　女性の脂肪に關すること……四四
第九　女性の臀部、及び腰部に關すること……四四
一　臀部
二　腰部
第十　女性の脚に關すること……四四

第十一　女性の胸部の（乳房）に關すること……四四
第十二　女性の頭部に關すること……四四
一　頭
二　顏
三　頸　髮
第十三　女性の音聲に關すること……四四
第十四　女性の美に關すること……四四
第十五　女性の疾病に關すること……四四

本　論

第一章　女性の體格……四八
第一節　外形……四八
第一項　頭　部……四九

第二項　胴　部……
第三項　四　肢……
第二節　身長……
第三節　體重……
第二章　女性の發育及び成長……
第一節　小兒より成年に至るまで……
第二節　早熟と晩熟……
第三節　女性の生活期……
第一項　嬰兒期……
第二項　孩兒期……
第三項　兒童期……
第四項　少年期……
第五項　青年期……
第六項　初老期……
第七項　老年期……

第八項　青年期……八五
第三章　女性の體質と稟性……八六
第一節　女性の體質は何んなもの……八六
第一項　女の體質は弱い……八六
第二項　女は病氣に耐ゆる力が弱い……八七
第三項　女は飢渴に耐ゆる力も弱い……八八
第四項　女の癒癒は鈍い……八八
第五項　女は苦痛に耐える……八九
第二節　女性の稟性……九二
第一項　稟性の意義、及び種類……九二
第二項　多血質……九四
第三項　神經質……九五
第三節　女らしい女……九八
第四節　男らしい女……九九
第五節　虚榮の女と新らしい女……一〇一

第四章　女性の發情期……一〇四
第一節　女性の發情期と年齢……一〇四
第二節　發情期に於ける身體的變化……一〇四
第三節　發情期に於ける精神的變化……一〇五
第五章　月經……一〇五
第一節　月經とは何んなものか……一〇五
第二節　月經の徴候……一〇七
第三節　月經の順調と變調……一一三
第四節　月經に關する古人の迷信及び觀念……一一三
第五節　月經の原因……一一八
第六節　月經の初潮……一二三
第七節　月經の終止……一二〇

第八節　月經と精神並びに其の生理作用……一六六
第九節　性交後に於ける女性の生物學的反應……一六八
第六章　女性の生殖器……一七一
第一節　概說……一七一
第二節　卵巢……一七二
第三節　喇叭管……一七三
第四節　子宮……一七三
第五節　大陰唇……一七六
第六節　小陰唇……一七六
第七節　陰核……一七七
第八節　前庭及びバルトリン氏腺……一七七
第九節　膣……一七八

第十節　內分泌と臟器藥……一七八
第一項　生殖腺の內分泌……一七八
第二項　その他の內分泌……一七八
第三項　臟器藥の例……一七九
1　卵巢製劑を不姙症に用ひたる効果……一七九
2　卵巢滿出と乳腺機能……一八〇
3　オオホルミンによつて著効を奏せし子宮發育不完全症及び之に因する病的無月經症……一八一
4　卵巢實質ホルモン製劑オオホルミン實驗……一八二
5　實驗例……一八四
6　總括……一八五
第七章　女性の皮膚及び體臭……一八八
第一節　皮膚の構造と作用……一八九
第二節　體臭……一九四
第八章　女性の筋肉と脂肪と運動……二〇四
第一節　筋肉と脂肪との割合……二〇四

第二節　脂肪增減の原因……一〇九
第三節　脂肪美……一一一
第四節　運動……一一四
第九章　女性の頭髮と陰毛……一一四
第一節　頭髮……一一四
第一項　男女の頭髮……一一四
第二項　頭髮の發生及び組織學的造具……一一八
第二節　陰毛……一二〇
第一項　男女の陰毛……一二一
第二項　陰毛に關する民俗の風習……一二二
第三項　陰毛の組織及び發生……一二三
第十章　乳房……一二三
緒說

第一節　乳房の形狀……一二八
第二節　乳房の構造……一二〇
第三節　乳房の發生及び其の美……一二一
第四節　乳房の變化……一二二
第五節　乳房と刑民事問題……一二四
第十一章　女性の腦髓……一二六
第一節　腦髓の構造……一二八
第二節　腦量……一二〇
第三節　腦髓の大小と組織……一二四
第四節　腦髓の發達……一二四
第五節　女性の腦髓は粗大……一二八
第十二章　女性の音聲と笑ひ……一三一

第一節　香料……二二一
第一項　男女の香料……二二一
第二項　香料と生殖器……二二五
第三項　發料器……二二七
第二節　女性の笑ひ……二二七
第一項　笑ひと品性……二二七
第二項　笑ひは何うして起るか……二二八
第三項　笑ひの種類……二二〇
第四項　笑ひの原因……二二二
第五項　笑ひは平和の基礎……二二五
第十三章　女性の肉體美……二二五
第一節　人體美の要素……二二五
第一項　男女に於ける美の相違……二二五
第二項　人體美の標準と要素……二二五
第二節　女性の臀部……二二九

第一項　臀部と美との關係……二二九
第二項　臀部の大小……二二九
第三項　臀部の比較……二二九
第四項　臀部と骨盤……二二九
第五項　日本の帶と西洋のコルセット……二二九
第六項　野蠻人の臀部……二二〇
第七項　豊臀と貧臀……二二二
第八項　臀の振り方……二二二
第三節　各人種に於ける美の感情……二二二
第一項　美人の標準……二二二
第二項　美と裝飾との關係……二二二
第三項　世界に於ける美の優劣……二二二
第十四章　女性の疾病……二二八
總　說
第一節　尿道炎……二二八

第二節　陰門炎及び膣炎……一八九
第三節　バルトリン氏腺炎……一九九
第四節　子宮癌病……二〇〇
第五節　卵巣炎及び喇叭管炎……二〇四
第六節　痲毒性僂麻質斯……二〇四
第七節　徹毒の一斑……二〇四
第八節　性感缺乏症……二〇五
　1　夢に見る快感缺乏症の一治驗例……二〇五
第九節　婦人病と醫師の選擇……二〇七
第十五章　女性と精神病……二一〇
第一節　精神病は男女共何れに多いか……二一〇
第二節　女は何ういふ時に精神病に罹るか……二一八

第十六章　女性の性慾生活としての賣淫……二二二
第一節　賣淫の定義……二二二
第二節　賣淫に對する報酬……二二五
第三節　賣淫の範圍及び種類……二二六
第四節　營業的性交……二二八
第五節　黑人と素人……二二一
第六節　賣淫婦の原因……二二四
　1　巴里に於ける賣淫婦の原因統計……二二四
　2　紐育に於ける賣淫婦の原因統計……二二五
第十七章　女性の性格及び其の社會的位置……二二七
第一節　其の男子との差異……二二七
　第一項　婦人の心意發達……二二七
　第二項　婦人の嗜好……二二九

目次終

第三項　異性に對する性的外の感情……三五〇
第四項　婦人の理解力……三五三
第五項　感情……三五五
第六項　意志……三五八
第二節　女性の特長……三六四
第三節　女性の本務及び將來……三七九
第一項　男女の協力と社會の發達……三七九
第二項　婦人の獨身……三八〇
第三項　婦人の職業……三八五
第四項　夫婦及び嫁姑の關係を明にする必要……三八六
第五項　將來に於ける婦人の地位……三九九
第六項　婦人の權利……四〇一
第七項　結論……四〇四

著者の人となり

1

「オイ、待て〳〵。」

「何か用があるか。」

「何處から來た？　何處に行く。」

「そんな事を答へる必要はない。」

「警官が職權を以て訊問するのだ。早く云へ。」

通行人と警官の間には尙二三の論爭があつた。それは或る夜の一時過ぎである。

警官は、する中に男の懷にいきなり手を入れ樣とした。男はそれを拒んだ。他人に懷中を弄ばれるよりはと云つて、自ら其の膨れた懷中から、メチニコフの「不老長壽論」を出して示した。

警官は横柄な態度で、男の住所氏名を尋ねた。それから職業を尋ねた。

「職業は醫者。」と男は答へた。

警官は洗ひ晒した浴衣に兵子帯をぐるぐる巻きにして居る男の様子をじろ〳〵見詰めて、

「嘘を吐け、貴様の様な醫者があるかッ」と吐鳴つた。この通行人は醫學博士ドクトル羽太鋭治君である。

2

それから幾日か經つて此話を聞いた時、私は其の警官の横暴な態度に公憤を感じ乍ら尚ほ「貴様のやうな醫者があるか」の言葉を可笑しく思つた。

羽太博士は、實際醫者らしくない醫者である。醫者、辯護士、教師、商人、俳優と夫れ〴〵職業に依つて、其典型的の型がある事を承認する人は、私がこゝで云ふ「醫

者らしい醫者」と云ふ言葉の意味を了解するのであらう。羽太博士は少くも、さう云ふ類型的の人ではない。

詳しく云ふならば、彼は生地の儘をさらけ出して見せる人である。虚飾と云ふと、少し範圍を狭く限定し過ぎるから、飾り氣と云ふ言葉を用ゐるが、彼は此飾り氣さへも、生れて來る前に何處かに忘れて來たのであらう。

3

神經質、粘液質と云ふやうに別ける見方。それからハムレット型、ドンキホーテ型と云ふやうに別ける見方。さう云ふ見方を別にして、他所行の顔をする事の上手な事と、生地其儘をさらけ出して見せる人と、此の二つに別ける事が出來やう。世間には確かに此二つの種類の人がある。そしてかう云ふ見方をする時に、世間の凡ての人は其那れかに屬する。

文明の度合は訓練の程度である。文明人とは良く訓練された人である。そしてよく訓練された人とは、他所行の顔をする事の上手な人である。文明の世に虚飾の多い事實は、此定理を裏書する。

ヘーゲルの云つた正反合の進化則を借用して來るやうな、廻り冗い、衒學的な努力を拂ふまでもなく、ルーソーが「自然に歸れ」と呼んだのは近代文明に對する凡ての革命であつた事が首肯かれる。自然に歸れの叫びは、即ち他所行の顔を呪ふ聲である技巧を用ゐるな、生地其儘をさなけ出して見せろ。これがルーソーの理想であつた。

醫學に於ても、近時此の理想に向つて新生面が開かれつゝある。そしてこれが醫學界の大きな、力强い、權威ある問題となりつゝある。

アドルフ・ジャストは、其著書「自然に歸れ」で、かう云ふ意味を書いて居る。

「醫者の病氣を治療するには、患者の弱點を見出す事が一番である。病氣は人體の弱點を襲ふものである。動植物に於ても同樣である。木でも勢のいゝのは、やどり木も

生じなければ、黴も生えないが、勢が弱つて來れば其弱つて來た場所にやどり木が生えたり黴が生えたりする。黴菌が人間を襲ふも常に同一の理で、臟器の丈夫な處には

醫へ黴菌が入つても發育しないが、弱つて居る處に入れば、忽ち繁殖する。こゝに一個中隊の兵が雨を冒して行軍するとして、それが悉く寒冒を引くかといふにけしてさうではない。或るものは腸加答兒を起し、或るものはリョウマチスを起し、或る者は氣管支加答兒、或る者は又鼻加答兒に罹る。同じ原因であるのに、夫れ〳〵別な病氣に取り附かれる。其人々の弱點を冒される證據である。故にまづ弱點を見出して、それを丈夫にせよ。これが生理的療法、即ち自然療法である。動物には一人の醫者もあるのではない。然し皆ひとりで治つて行く。熱あれば腹を冷たい地に附けて冷す。傷が出來れば、自分の舌で舐めずつて日光に晒す。渴すれば水を飲む。饑えれば草を食ふ。かくの如く、動物は皆自然的療法に依つて、其健康を保持して居る。人間も亦自然力に逆ふ事無ければ、病氣には罹らぬ。醫者の治療も自然力を伺ふ事が最も必要で

ある。」

と説いてゐる。

此學説を實地に應用した試みをしたものでは、獨逸ユングルボルンに、自然療法所が出來て居る。そしてそこでは空氣療法、日光浴、熱氣浴等の自然療法が、從來の藥物的療法に對する革命として、漸く其眞價を世間的に認められて來て居る。

私の話が少しくデタールに渉つた事をお詫びしなければならぬと、私は考へるが、私は自然が最後の勝利者であると云ふ事を裏書する必要を感じたからである。必ずしも生地其儘をさらけ出して見せる羽太博士の爲めに、辯護の地位に立たうとのみする不醇な思想が、私の心の中に波打つて居る爲めではない。

4

見も角も、生地其儘をさらけ出して居る事に於て、羽太博士は個性の明確な人であ

る。其輪廓は太い、力のある線でくつきりと描き出されて居る。彼の日常起臥を目擊する時に、此の印象は愈々適確となる。此の意味に於て餘りに類型的な——それは他所行の顔をする事の上手な類型を持つた——今の醫學界に、羽太博士の存在する事は大いなる意義を刺み附けるものであると考へる。

彼が東奥の一郡査の子から身を起して今日を成したのは、實に此特性に基因して居る。彼がドクトル△△△△氏のやうな物質上の勝利者となり得ないのも、又此特性に基因して居る。彼が尿道消息子に就て、卓越した技術と、海嶽の如き自信とを持ち乍ら、尙且つ書籍製造家の境地に沈湎して居るのも、又此特性に基因して居る。

私は勢ひ彼の特性を、私の見方に依つて説明する事の必要を感ずる。

私は屢々彼と會ふが、彼の盛裝したのを見た事がない。無論、羽織を着たのを見た

事がない。洋服をすら着たのを見た事がない。(一着の洋服を持つて居るか居ないかさへ、私には疑はしい)夏は洗ひざらしの浴衣一枚、冬は木綿縞の袷か綿入、それに餘り新しくない兵古帯をぐる〳〵捲き附けて居る。——此の兵古帯をキチンと結んで居るのを、私は又見た事がない。

骨太く、肉豐かに、背も高いが、彼は少くも好男子と云ふ側の人ではない。其風采から云つて、先づ田舎の青年會の幹事と云ふ處である。肥料桶が似合ふと云つては、酷に過ぎるかも知れぬが、芋や大根を入れたボテ籠を擔ぐ位は、寓更無調法でも無さうだ然し五分刈の頭、ギョロ〳〵した眼、血色のいゝ顔色、ふしぶたつた太い手の指、大きな皮の厚い掌、それから與へられる印象は、力の印象である。エナージの印象である。

先頃私が會つた時、彼が毎夜一時頃まで讀書をして居つた。そして朝は六時から獨逸語の勉强に通つて居た。睡眠時間は三四時間きり取らないと云つて居たが、格別睡

さうな顔もしないで、元氣のいゝ生々した話をして居た。

私が彼によく會ひ〳〵する處は、彼の書齋である。そこは學校の寄宿舍を思はせるやうな、極めて飾り氣の無い西洋室で、粗造の大きな書棚の上に、陰氣な裝幀の醫書と、文藝文面の花やかな裝幀を凝らした書物が雜然と積んである。此の書棚は殆んど行く度に新刊書が殖やされてある。メチニコフ、ウキルヒョー、ベーゼー、ギーレー等の醫學家と並んで、モーパッサンやストリンドヘルヒや、ドストエスキー、ショーノルドウ等の文豪が見出される。彼は診察の間、一寸でも閑があると、此書齋に閉ぢ籠つて、これらの書を捗捗反覆するのが持病のやうになつて居る。

私の訪問の都度、彼は我々の家庭で用ゐる物よりは、五六倍もあると思はれる大きなビールのコップに、サイダーを一度に二本も次ぎ込んで、(此の大きなコップは一度にサイダーの二本位は優に入る。)そして私に勧める。彼は自分でも同じやうに注いで私が飲まうが飲むまいが關はず、先づ自らガブ〳〵と飲む。獨逸語で云ふと、エッセ

ンではなくてアレッセンである。所謂牛飲である。それから、私は煙草の灰が疊の上に落ちたのを氣にして（私は餘り氣にしては疊の方が却て恐縮するかとさへ思はれる程の疊ではあるが）手の指の先でチョイ〳〵灰を拾ひ取つて居る間に、彼は菓子皿の中を一時も早く空にして了はなければ、義務と責任が濟まないとでも思つて居るやうな調子で、菓子をムシャ〳〵折まんで喰つて、自分の膝の前ばかりならまだいゝが時には私の膝の前でも、煎餅やウエーハーの屑を、雪が降つたやうにそこら一面に散らす。

或る時、一人の青年が治療を受け乍ら、「痛いからもう止して下さい」と云つた。すると羽太博士は俄かに顏色を替へて、吐鳴り出した。

「止せ？　止せとは何だ。僕は醫者としての權威を以て、君の治療をして居るのだ。君のやうな義務觀念の無い人の治療はしたくない。とつとゝ起きて歸れ。」

すると其青年は腹を立てゝ、歸る處か、却つて、

「先生、餘り痛かつたので、ついあんな事を云ひましたが、私が惡かつたから、勘辨して下さい。」

と詫びた。そこで、羽太博士も「さうか」と氣嫌を直して再び治療を續けた。

羽太博士はこんな風によく憤る。直情徑行と云ふよりは、深い自信と、生一本の誠意と、犧牲的の努力が他人に理解されないかと思ふと、もう堪へる事が出來ぬのであろう。それであるのに彼の處へ來る患者は、よく彼に依頼して、どんなに憤られても平氣で又やつて來る。他の醫者は——大學病院と權威ある一二の私立病院を除いては——悉く皆患者にお世辭を云つて、（私の云ふ他所行の顏を上手にして）一人でも多くの患者を取ろうと腐心して居るし、又さう云ふ處へ行く患者は、一寸でも醫者が氣に障るやうな事を云つたら最後、「あの醫者怪しからん奴だ」と云つて、二度とは行かぬのが普通であるのに。羽太博士の診察室に集つて來る患者の多くは大學生である。彼の診察室で話される言葉は、日本語と、英語と、獨逸語と、佛蘭西語である。彼の

診察室の話題は、文藝や哲學の話、科學の話、それから女の話、政治の話である。「僕の診察室は一の社交倶樂部だ」と彼自身云つて居る通り、確かに彼の診察室の小さな窓には、社會の波が或る時は高く、或る時は低く、間斷なく常に打ち寄せて來る。

6

美顏術と云ふ現代人に對する皮肉な諷刺的な職業を持つて居る××氏は、獨逸に着くとすぐ、三千枚の葉書を遙かに母國の知人に寄せた。三千枚の數に驚ろいた或る留學生が、「素的な數だね」と云ふと、「君この葉書一枚出しさへすりや、獨逸に三日居ても三年留學しても同じだよ」と云つて笑つた。そして歸朝後數年、今日尙ほ「院長渡歐の節」の文字が、氏の廣告文中に見出される。××氏の態度は飽までも皮肉である內容の空虛な洋行や學位に對する冷笑とも見れば見られる。

實際私は伯林、若くは倫敦、巴里のスタンプを押させる爲めの留學や、「院長渡歐の

節」の文字を並べる爲めの洋行が、世間にどの位多いかを想像する事が出來る。羽太博士の外國留學が同じ目的であつたかどうか、私はまだ聞いて見る機會が無かつたが彼が獨逸に留學中、前後通じて十枚の葉書を出したか出さぬか位に過ぎなかつたのは貧乏で葉書を買ふ金さへ惜しまなければならなかつた爲めばかりだとも思はれない。

ドクトル△△△△氏の例を又こゝに引く事は、氏の寬恕を請はねばならぬと思ふが某氏が往年將に洋行の途に上らんとするや、自ら朋友知己を勸誘して送別の宴を盛んならしめ、其東京を立つに當つて、樂隊附の行列を組んで、堂々と停車場迄練り込んだものである。そして歸朝の時も前日の如く樂隊附の行列に護られて、萬歲歡呼の裡に錦を母國に飾つた花やかにして壯んな歷史を持つて居る人である。

然るに羽太博士に至つては、其洋行の門出を送るものは、只彼の母堂と最愛の夫人のみ。其歸朝に當つては、豫め何人にも通牒せず、突如として行李を運び來て、「今歸つたよ」と。最愛の夫人を驚かした。

彼の歸朝を知つた友人が、彼を訪うて歐洲文明化したハイカラ振りを見んとすれば何ぞ圖らん、蓬髪垢面、奮態依然として一個の蠻カラであつた。

「如何です、暹羅巴は。」

と客が問へば、彼は唯一語、

「澤庵漬が食べられないのに困りました。」と。

羽太博士は澤庵漬を慾しつゝ、ドクトル試驗を受けて來た人である。

7

羽太博士が書籍製造家である事を、私は前に直言した。それは悲壯な事實である。清息子を持つ手を、屢々ペンに替へて、抑々彼は何を求める。所謂無用の書を賣つて有用な書を購ふの境地か。彼に於て書籍製造家たる事は、必ずしも不名譽とするものではない事を私は信ずる。

今や彼は其幾次かの書籍製造を完成した。彼の研究の範圍から、縁遠い知識と經驗をきり持たぬ私が、彼の著作に對して、徒らに空虛な贊辭を呈するよりも、寧ろ著者と未見の讀者の間に立つて、著者を讀者の前に紹介する事は、私の義務であると考へる。讀者が此貧しい紹介に依つて、彼に對する偶像崇拜が一朝にして破壞されやうとも、(恐らくはさうであらうが) 或は又彼のために、進んで彼の靴の紐を結ばん事を渴仰し始めやうとも、それは固より私の關係した事ではない。恐らく羽太君も、私の微衷を諒とするであらう。

鈴木善太郎

女の肉的研究

醫學博士（ドクトル メデチーネ） 羽太鋭治著

緒論

第一節　男女性の生物學的觀察

第一項　男と女

凡て生物には雌雄兩性の區別がある。人類に於てはこれを男女兩性といふ。男女兩性には各々異つた特徴がある。男性には男性の特徴があり、女性には女性の特徴がある。これを男女性の性的特徴といふ。

凡例

此書は女性の研究の外篇である。内篇として
は「婦人性慾の研究」（本書發行所より近日發行
すべし）がある、本書と併せて一讀されん事を
希望する。

本郷區眞砂町三十七にいづま醫院にて

著者識

性的特徴の最も著るしいものは生殖器の相異である。男性には男性の生殖器を具へ、女性には女性の生殖器を具へてゐる。この生殖器の相異及びその作用の相異を男女性の第一義的特徴といつて、その他の兩性對比上の相異——例へば男性は女性よりも腕力が強いとか、女性は男性よりも感情的だとかいふ相異——を第二義的特徴といふ。

第二義的特徴も、その殆ど全部第一義的特徴に關聯附隨して具へられてゐるものであるが、仔細にこれを研究して來ると、或る種のものは、長い間の風俗習慣や教育遺傳等の影響を享けて相異を來たしたものもある。たゞ何の邊までが先天的本來の特徴であつて、何の邊までが人爲的に——社會的に歴史的に——原因されてゐるかゞ問題である。例へば今日では男性の方が女性よりも強い腕力を持つてゐるが、希臘の物語に出て來るアメーゾン族の如き、男子も及ばざる腕力を女性が持つてゐた。女性の腕力の弱くなつたのは、長い間の社會的習慣——男性の壓迫——によるものだとされ

てゐる。男女兩性の性的特徴は斯樣に複雜なものであるから、吾人が女性を研究しようとするには、先づ第一に男女性の因つて以て分るゝ原因——性の起源から研究してかゝらねばならないのである。

第二項　男女性の起源

性の起源——これは嚴密な意味から云へば、單細胞内に由來するものである。單細胞生物といふのは、一個の細胞から一個の生體を成立する極めて微細な生物であつて、アメーバ、草履虫、夜光虫、ツリガネ虫、綠虫、虫藻の類がみなこれに屬する。

單細胞生物は顯微鏡的の極めて微細なる生物であるから、その雌雄を區別することは甚だ困難とされてゐたが、近年に至つて池沼の水草に附着してゐるツリガネ虫に雌雄の別あることを發見された。

ツリガネ虫が普通水草に附着してゐる狀態は、恰も樹の枝が繁茂してゐるやうに互

に柄と柄を連繋し群體的に生存してゐる。そしてその生存を永續する必要上時々接合するが、その接合は必ず血縁のやゝ遠いものに限られ、同族の虫又は群體の分裂によつて繁殖したものは決して接合しない。

夜光虫、草履虫のやうに游離してゐるものは、異系統の同種の虫と接合することも容易であるけれど、ツリガネ虫は前に云つたやうに連繋して群體をつくつてゐる虫であるから、雌雄二匹ともに動くか、或ひは游離しなければ、異系統のものと接觸することは出來ない。

そこで何うしてツリガネ虫は接合するかといふと、先づ分裂作用によつて二種類の個體を生じ、比較的大きな滋養顆粒を含有してゐる一方が、群體の枝から分離して水中を游走し、他の群體に達して相手を求める。分裂した分の一方――小さい方の虫は、系統を異にする比較的大きい虫の體内に潜入して融合するのである。

斯樣にツリガネ虫の如き單細胞生物にも、その形態、擧動を異にする二樣の性的特

徴があり、その特徴は恰も高等動物の卵子と精子との相異に類似してゐるので、その大きい方を雌と稱し、小さい方を雄と呼ぶのである。

第三項　高等生物の雌雄性

前述のツリガネ虫の觀察によれば、性の起源は疑でもなく單細胞生物の單一細胞内に由來するものであることが確められるが、それでは單細胞生物ではなく、有組織的生物の性は何處に起因するのであらう。

これは手易く論斷することは出來ないが、恐らくは原始的雄性と原始的雌性とし做妙なる融合作用の結果によるものだらうとされてゐる。

一體、多細胞生物の個體生活の初めは、二個の生殖細胞即ち卵子と精子との融合によつて成立するものであるが、中にも有性生殖を營む動植物は、最も完全なる受精作用によつて新生體を生成する。

從つて無性生殖を營む單細胞生物の雌雄性の遺傳と、多細胞生物であつて有性生殖

を營む高等動殖物の受精作用に於ける遺傳とは、全く趣きを殊にすることが明らかである。

又等しく完全なる有性生殖を營むものであつても、人類の男女性と動物の雄雌性とは、その遺傳關係に於て全く歸趣を異にするものである。

第二節　女性の社會史觀的關係

第一項　原始時代の女性

吾人は前節に男女性の特徴の或る種のものは、社會的に教育的に影響されてゐることを說いた。故に女性の特徴の因つて以て來る原因を委しく知るには、是非人類の原始時代に溯つて、男女兩性の社會史的觀察を試みねばならぬ。

人類の原始時代に於て、先づ想像されることとは、今日犬猫やその他の諸動物に見るやうな亂婚時代があつたゝらうといふことである。やゝ後生に至つて、先づ親子の

間に性交が禁ぜられ、次いで同母の兄弟姉妹、續いて母系の叔姪その他の近親結婚が禁ぜられるに至つたのであらう。

人類學者ツウイス、モルガンの說によると、人類の兩性關係は左の五形式を經てゐるといふ。

第一期は亂婚時代で、全く親子兄妹の見境の無い時代である。凡ての男性は凡ての女の夫であり、凡ての女性は凡ての男性の妻であつたのである。

第二期は半血族群婚で、同女の兄弟姉妹ならざる一群の兄弟と、他の一群の姉妹との團體的結婚である。

第三期は偶婚又は一時的一夫一婦で、一男一女の結合ではあるが、離合極めて自由容易な時代で、母系制度に下に於ける男女結合の樣式である。

第四期は一夫多妻で、母系制度に代る父家長制に伴ふて起つた風習である。この時代から男權が確立された。

第五期は今日の一夫一婦制である。

第一期第二期第三期の時代までは、女性の體力も智力も男性に比して左程遜色はなかつたのであるが、第四期の父家長制に伴ふ男權確立の時代から、女性は種々の社會的壓迫の影響を享けて、今日の如く體力も智力も男性に劣つて來たのだといふ。

ハベロック・エリスの說く處によると、原始民族の男性の仕事は、筋肉及び骨骼の力强い發達を要し、一時に十分の力を出て、一時に十分の休息をとり得るやうなものである、女性の仕事は子供の養育、煮焚等家內の勞働で、一時に力を要さない代りに、連續的に絕えず力を出して行かねばならぬやうなものであつたといふ。つまり男性は烈しい努力を要する代りに、短い時間で濟むやうな仕事に適し女性は長い時間に受動的な仕事をするのに適してゐたのである。

然るに、種族の位置や生活が安全になつて來ると、男性は漸次武器を捨てゝ、女性の徒事してゐた產業方面に力を注ぎ、その仕事を專門的に發達させて行つた。男性が

女性の仕事を奪取して行くうちに、分業の狀態が漸次男性的に變化して行つた。

併し、產業制度が開けて行つても、男性の戰鬪者であることに變りはなかつた。共和的な產業市に於てすら、勞働者は同時に戰鬪者であらねばならなかつた。斯くして女性はだん〳〵閨房內に押し込められて行つたのである。

第二項　中世期の女性

女性の仕事は遂に殆どその全部を男性に奪はるゝに至つた。女性の働く處は家庭と娼家とのみとなつた。

斯うした道程は兩性の體質や智力に大なる結果を生じた。野蠻時代に於けるよりも一層女性が男性よりも劣つた體力智力をもつやうになつた。そして自然は財物視され動產視され、賣買、交易、贈與の對象物とされ、性慾滿足の一道具とされるに至つた。

併し、中世期に至りメリスト敎文明がやゝ女性を高等の地位に引き上げた。兩性間の結婚は宗敎的道德的制度の形式とり、一夫一婦にして永續的契約のもとに行はなけ

れはならなくなつた。

斯くして女性の地位はやゝ向上し、一夫一婦的基督教國民は、他の一夫多妻的國民——佛教徒や回教徒——に對し、精神的に物質的は優越性を生ずるに至つた。

第三項　近代の女性

歐羅巴の文明殊に英佛の二國は、事物の性質及び原因に就て極力先入的思想を捨て進歩的知識を得ようとする著るしい傾向が現れた。ルッソーの革命思想、ルーテルの宗教改革は殊にこの衝動を刺戟した。

自然女性に關する問題をも研究されるやうになつた。同時に又經濟上の革命が起つて、女性をその家庭から引き出し、男性と殆ど同樣の仕事に從事させるやうになつた。新たなる產業制度が起つて、女性をして益々男性と同樣の仕事をさせるやうになつた。殊に機械の發明は愈々この傾向を助長した。

ルッソーの自由平等論の叫びは女性をも刺戟し、有名なグーヂが起つて女權宣言を

叫ぶに至つた、グーヂは死刑に處せられたけれど、後から〳〵女權論者が現れて、遂に近代の婦人運動を生むに至つた。

斯うした傾向は兩性の優劣を徐々に薄らがせて來た。小學校は勿論大學でも兩性相並んで學ぶといふことが合理的であると認められて來た。男女の運動遊戯は殆ど共通となりつゝある。斯うした狀態は次第に女性の第二義的特徵を取除きつゝある。

殊にその風俗に至つては、男性と寧ろ正反對なる變態的傾向をさへ帶ぶるに至つた。男性が頭髮を伸ばし油脂をもつてテカ〳〵光らせるに反し、女性は却つてこれを切斷して得意然たり、男性が裾長の衣服を纏ひ、箸の如く細きステッキを携ふに反し、女性は却つて半裸體同樣の寢卷の如き洋服を着用し、握り太の榴木然たるバラソルを振り廻して、大道狹しと横行濶歩するに至つた。若し夫れこれを思想的方面に見んか、女性特有の貞操觀念の如き、今や全く地を拂つたかの觀がある。

斯くの如きは果して健全なる女性の發達であらうか。以下主として肉體的方面より

女性の解剖を試み、これ等の善惡可否を檢討して見ることゝする。

第三節　思想家の女性觀

以上に女性の史的觀察の一般を述べたが、尙ほ思想家の女性觀を一言しやう。

婦人は昔から、感情に富んで、嫉妬深いのと、知見の狹いのとで、度し難いものと、卑しめられて來たことは、東洋でも、西洋でも同じであつた。支那では女子を小人と同視し、印度でもマヌ法典には、女子は萬事自己の思ふ儘に、自由に處理することの、能力の無いものと規定され、佛敎では、毒蛇に比し、又夜叉に喩へられたのである。

斯くの如く佛敎では、女子を嫌つたけれども、釋迦には、伯母の大慶道といへる婦人が、漸く釋迦の許しを得て、敎團に入り、比丘尼となつて、佛敎を修めた結果、澤山經といへる小乘部の中に、こういふことが記されてある。それは形は女人でも、其

の精神が丈夫であるときは、男子と同じである、と。さすがは一切衆生有佛性として、平等觀を有せる釋迦だけあつて、卓見と謂ふべきである。

右の事實に依ると、釋迦は一切衆生を主として、女子も男子と同一に、視たことは明らかであるが、後世に至つて、痛く女子を貶するに至つたのは、全く釋迦の本旨を誤解したものと謂はねばならぬ。

然るに支那の儒敎は、徹頭徹尾、女子を卑しんで、毫も同情しなかつたのは、孔子に女の弟子が無かつたことだと、論じた人がある。或はさうかも知れぬ。

我が國でも、女子に對する觀念は、支那や印度と大差が無い。これは全く儒敎と、佛敎との影響である。何故といふに、上古では女子を尊敬し、隨つて其の社會的位置も、相當に高かつたのであるが、儒敎及び佛敎の傳來以來、漸く女子を卑しむ風を生じたからである。

斯くの如くして、寺院の境內へは、女子の入るを禁じ、山などでも靈山と稱せらる

ゝところには、同じく女子の登山を禁ずる樣になつた。

泰西でも、古代希臘の法律に依つて見ると、女子は男子に服從すべきものと、規定してある、これは女子は身體及び精神とも、不完全で、男子と比較すべきものでないといことから、起つたもので、有名なる碩學アリストートル、及びプリニウス兩氏の如きすら、女子を極貶して、女子は人類として、一人前のものでない。即はち無用の人間で、人類の價値の無いものであると、罵倒した。

羅馬法でも、良人の權內に、妻に對する生殺與奪の權を與へて、女子をば奴隸の如く見做したことは、尙、濠斯太良利亞、亞弗利加其他野蠻人の女子を見るが如くであつた。

一般に於て羅馬では、女子を輕卑したのである。

基督は是れ等と全く異つて平素博愛主義の上から、女子を男子と對等に看做した。

けれども後世に至つて、之れを曲解せるものが出て、女子を貶した。嘗つて

女子は人間なりや如何

といふ樣な、突飛もない問題が、中世時代の宗教會議に於いて、眞面目に討議せられたことすらあつたのである。

斯くの如く基督敎で、女子を貶したのは、人祖アダム、エヴの罪等に依つて、女子を罪惡の原因と、思惟せるに依るもので、テルツリアンといへる人は、次ぎの如き口調で、女子を罵つた。

世の女どもよ。お前達は何故に、身に喪服を着け、涙を浮べて歩かぬか。お前達の爲めに、人類は墮落したではないか。

又、ヒエロニムスといへる人は、女子をもつて、

惡魔の門

なりといひ、佛蘭西の文豪ゾラ氏は、女子の嬌艶なる容姿をもつて、男子を誘惑せしむる魔力となし、

之れに驕つて、能く堕落せざるものあらんや

と歎息した。

次ぎの俚諺に依つて見ると、女子は通常の人間にあらざるかの如く、觀られたことが知らるゝであらう。

露西亞の諺に、

女子よりは犬が怜悧である。犬は主人に吠えぬ。

女は髪が長く、智は短い。

とある。女を犬より劣るとは、侮蔑も甚だしいが、併し一面の眞理は籠つて居る。況して女の智の短いことは定論で、茲にいふまでもない。

英國の諺でも、恁ういふのがある。

女に智慧があつたら、驢馬が階子に登るであらう。

金の女よりは、糞の男。

死したる女にも、心を許すな。

女に心を許した爲めに、大事の破れた例は、古來多くある。

女の涙と犬の跋とは、共に虚僞である。

女子に關する俚諺は、右の外甚だ多くあるが、一々擧ぐる遑がないから、之れを略して、近代思想家の女性觀を少しく述べやう。

近代の厭世的思想家ショペンハウエルは「女子は子供と同じである」と稱し、ニイチエは「男子は最も危險なる玩具として婦人を欲望するものである」と女性を蔑視し、女性は只男子の性的玩具であるとなした。併しイブセンの如は「人形の家」に於て婦人の解放を暗示し「海の夫人」「幽靈」などに於て其の思想を尊重すべきことを暗示して居る。又二十世紀に於て女性の最も優れたる思想家とせらるゝエレン・ケイは女性の價値は敢へて男子に劣るものにあらずとし、兩者を同一の水準に置きて性道德の革命を力說し、バアナアド・ショウは性的關係の無自覺を痛罵し諷刺し、「多くの結婚は

戀愛を賣物にする一種の公然の商賣で、その代償として金を拂つたり、宿泊料を供給したり、自體を奴隷としたり」するのであると、天坪に掛くれば未だ男より遙かに女が輕いと見て居る。

第四節　性慾の對象としての女性

何が故に女子は、箇樣に古昔から、短才無智で、其の性質が惡いものと視られたかといふに、夫れには社會上の種々なる關係もあるであらうが、一つには宗教上又は道德上で、色慾を非常に罪惡なものとして、男子を迷はすものは、女子なりと考へたのと、今、一は、生理上月華のあることをもつて、之れを罪惡に對する、神の戒しめと考へたることから、斯くは女子をもつて、或は罪惡とし、或は穢れと信じたのである。

彼の女の產で死んだものは、血の池地獄に陷るとか、或は血の釜で煮らるゝとか言へる迷信の如きは、全く月經から來たもので、其の起りは印度である。之れは印度

では、月經を非常に不潔なものとして、平素でも、女をば汚れたものとして、古昔は女は男と一處に、食事する事は出來なかつた。平素ですらそれだもの、況して月經時と來ては大變なもので、先づ別に拵らへてある小屋に移すとか、食物は一定の器物に入れて、母屋から之れを送り、而かも之れを運ぶものも、其の持つた器物から、汚れるといふので自分も能く身を清めるといふ騷ぎで、全く他と隔離するのである。

日本でも或る地方に、是れに似た習慣のところのあるのは、印度の遺風で、南洋諸島にも、恁ふいふ習慣がある、歐洲でもカモエットといふ種族では、矢張女子を汚れたものとして、特別に取り扱かつたことのあるのは記錄に殘つて居る。

生理上から言ふと、月經は姙娠と密接なる關係があつて、月經の無い婦人こそ、不具で、女の大切な役は盡くされぬのであるから、順調に月經のある婦人は、喜ぶべく、賀すべく、一方に於いては之れを擯つて、大事にしなくてはならぬものであるのに、それを汚れとして、忌むのは謂はれなきことで、野蠻の遺風と謂ふの外はない。さう

して其の蠻風は、迷信から來たものであることは、多言するを要せぬであらう。

次ぎは女は、色慾の基であるといふことであるが、之れに就いて、少しく述ぶるであらう。

色慾は生殖を營む爲めに、必要條件として、天から人に賦與せられたものであるが――、人ばかりでなく、動物も同樣であるが、動物には色慾の時期があつて。人間の樣に濫交淫亂等に陷ることはないから、別としなくてはならぬ――甘いものは兎角過ごし易く、愉快なるものは、輒もすれば耽り易き喩への通りで、色慾は甘く且つ、愉快なものであるだけ、其の度を過ごして、濫用に陷る結果、害を招くことが多い。

昔から色慾を恐れて、深く此れを戒しめたのは、こゝにあるので、釋迦は之れを、野火の草木を燒くに比し、又、荒象を馴らすそれにも喩へた。呂氏春秋に、

靡曼皓齒、伐生之斧

とあるのは、女子を伐生の斧に、喩へたのである。又、或る人が之れに對して、

軟かな藥研でおろす命かな

といつたのも同樣で、色慾を恐れたのであるが、其の裡面を見ると、其の色慾の源を、女に歸したことは、歴然として明かである。

即ち女は、其の色香をもつて、人を迷はす魔物である。女の笑ひには家を傾け、城を傾くる魔力があつて、昔から女の色に迷つたものに、其の終を完うしたものはない。されば色を慎むは、女を遠ざくるにありと、印度では釋迦が眞先きで、鋭鋒を女に向けて、之れを退治しやうとした。

釋迦ばかりでなく、孔子も女色を恐れて、之れを戒しめたことは同樣である。

けれども是れは、誤つた見方で畢竟女を讒誣した說に過ぎぬ。其の故如何となれば、色情なるものは、男女相互ひの間で、構成するところの一種の感情で、色情の本源は、男と女の兩方にある。獨り女が色情の標的となる理のものでない。之れを言ひ換へると、女が獨り男を迷はす魔物ではない。女から言ふと、男も等しく女を誘惑す

る魔物で、女に取つては、男は恐るべきものである。

それは實際の順序をいふと、男が先づ女の袖を引き、其手を握つて、自己の所有物とするまでに、種々に手段を竭くすのである。

男が女に、金を注ぎ込むのは、此の時である。女の爲めに命までもと、打ち込むのも、此の時である。けれども女は別に有難いとは思はぬ。女に依つては、却つて迷惑で堪らぬものもあるであらう。何故といふに、女は男に心が無いからである。併し其の親切には、流石に情なくも出來ぬから何時しか碎けて、男の心に從ふ樣になると、其の女は、最早男の藥籠中のもので、何うともなるのである。

例へば上流の墮落息子が、嫌がる小間使を附け廻はして、無理に口說き落した樣なもので、さういふ種は、新聞の三面記事に能くある。箇樣に男が、女を落して、其の色に耽りながら、女が男を迷はすやうに言ふのは、矛盾ではあるまいか。間違ひではあるまいか。

若し女郎、藝者のやうに、女から進んで、男を蕩かすものなら格別であるけれども、藝者女郎は、特殊の女で、婦人として、一般的のものでない。一般的の女には、女の方から男を迷はすものは少ない。女で墮落したものは、多くは初め男に玩弄されて、共俱に墮落したもので、もとを糺せば、男の犧牲となつたのである。

何故に女は、男の犧牲であるかといふに、これは生理上、男は發動的で女は受動的なるからである。發動的であるから、男は進んで女を挑み、女は挑まれて、其の玩弄に甘んずるのである。

今日でこそ、男女の間に對等の權利を認め、女子の位地も高くなつて、家庭の中心、社交界の花とまで、尙ばるゝ樣になつたが、原始時代にあつては、女子は單に男の色慾を滿たすべき器械の如く見られて、位地も、權利もあつたものでない。

女の居らない家は、淋しいとか殺風景だとかいふのは、女に依つて樂しみを取ることが出來ぬからである。女は男が居なくとも、さほど困らぬが、男は女が居ないと、

大變に困つて了ふ。これは全く男が、女を樂しみとして居る爲めである。

女が家庭の中心といふものは此の意味で、一家に歴乎たる男が座つて居れば、それで家庭は成り立つて行くのであるが、女が居ないばかりに、其の家庭が成り立たぬとは、全く快樂がないからである。女を社交界の花ともて囃すのも、これで、女は何うしても、花として、人に眺めらるゝのが、全く其の天分である。

箇樣に男が女を、色慾の器械として、之れを玩弄した時代のあつたことは、現今でも濠洲其の他の野蠻民間に於いて、見られるところである。左に之れが說明を試むるであらう。

一體に野蠻人は、思想が單純で、知識も、道德も缺けてゐるけれども、獨り色慾のみが盛んで、之れを滿たさんと欲する念が、最も强くある。此の犧牲に供せらるゝものは、すべて女子で、纖細で、而かも容姿の優れた女ほど、多く人の目標となつて、爭ひの焦點ともなるのであると、彼のハーバード、スペンサー氏や、ジヨン、ラボツ

ク氏等も言つた。

是れに由つて之れを觀ると、女は彼れ等男の、玩弄物となる爲めに、生まれて來たやうなもので、女は其の壓制に甘んじて、彼れ等の色慾を滿たすべく、力めねばならぬ。人類學者で有名なタイトル氏の言ふには、劣等な人類ほど、色慾が深く、獸的である。而かもその性質が頑固で、之れを制し、之れを和らぐるの理想が乏しいので、働作が粗暴で、殘忍酷薄であると。

斯くの如く蠻人が、女子に對して苛酷なる其の主原因は、色慾にあつて女子を玩弄物とするが故である。南洋のフヒジー島では、此の風習が最も盛んで、女子は恰も一種の玩弄物の如く、男子は隨意に之れを賣買することも得れば、貸借することも出來るといふことである。スペンサー氏の言ふには、同島の男子が、勝利を得て戰場から歸り來るときは、之れを慰藉するものは、悉く女子で、粉色を施し、裝ひを凝らして、男の意を迎へなくてはならぬ。隨つて女は、一擧一動、男子の隨意たらざるはな

し。

濠斯太良利亞でも、男子の女子を遇することは、頗る酷薄で、一般に一夫多妻の風が行はれるので、資產に豐かなるものは、從つて多くの妻妾を有することが常である。之れ全く彼れ等の、荒淫に基づくもので、其の荒淫を述ぶるには、先づ彼れ等の妾を蓄ふる理由を說かなくてはならぬ。

我が國及び支那、朝鮮、シヤム、安南、ビルマ、印度、波斯、土耳古等に於いても、正妻の外に、多少の婢妾を置いて、之れを樂しみとする習慣のあることは事實で、支那人は、之れをもつて、後繼者を得る爲めにありといふけれども、後繼者は勿論、多くの子供のある場合でも、妾を置くものゝ多くあるのは、何ういふ譯であらうか。

蓄妾の初めは、妻に子が無くて、一家斷絕する恐れのある場合で、止むを得ず內々で、假りの妻として、妾を置いたのが習慣になつて、後繼者の有る人まで、公然と妾

を置く樣になつたものと思はれるのである。して見れば今日の妾は、祖先の祭りを絕やさぬ爲めではなくして、其の目的は主として、色慾を滿たす爲めにあることは言ふまでもないところである。之れを要するに、蓄妾は野蠻國に於ける、一夫多妻の蠻風で、人倫に背ける行爲なることは勿論である。

さて右の濠洲、亞弗利加及び亞米利加等の土人間に於いて、男が女を得るには、其の父母から之れを買收することもあるし、或ひは他部落から、奪掠し來たることもあるが、孰れにしても男子は、女子に對して、生殺與奪の權を有して、少しでも其意に滿たさぬことがあると、忽ち之れを打擲し、甚だしきは、其の生命を絕つに至ることすらあるので、妻妾等は、其の夫をば鬼人の如く恐れて居る。憐れむべきは、實に野蠻社會の女子である。

ジヨン、ラボツク氏に依ると、此れ等の蠻人は、結婚するとも、夫婦の間に、眞の愛情なく、且つ男子は、甚だ短氣で、瑣細の過失があつても、其の婦を打擲し、之

れが爲めに、婦は傷つき、或ひは死することがあつても、彼れ等は恬然として、毫も意に介することはない樣である。それで試みに彼れ等に向つて、其の妻を娶るのは、何の爲めであるかと問ふならば、唯だ情を滿たし、且つ食餌、薪水の勞を執らしむるが爲めであると言ふのであらうと。

女子をもつて、物品又は玩具と、同一視せる蠻人の思想は、是れで能く判明さる。彼れ等は女子をば、單に色慾を滿たす爲めに、存在するものと思念して、十分に其の獸性を發揮したことは、爭はれぬところである。特に此の思想は、軍人功に誇つて、武士を社會の花と、尊敬せる時代に著しくある。斯くの如くして屢々軍功に酬ゆるに、女子をもつてし、或ひは他種族より掠奪せる婦女をもつて、妻妾と爲すの風を現出するに至つたのは、怪しむに足らぬ。

支那の歷史を繙くと、歷代帝王の興る毎に、功臣に妻女を賜ふて、其の勞を慰めた例が、極めて多い。西洋でも斯かる例は少くない。我が國は何うであらうか、左に少

しく之れを調べて見やう。

畏こくも我が神武の帝、東征して夷を平げ、國土を統一して、初めて建國の基礎を定め給ひし時、功を論じ、賞を行つて、それ〴〵功臣を封じられたが、其の中美姫を賜つて、宿の妻としたものもあるやうである。

それから景行天皇が、熊襲征伐のとき、詭計を用ひて、熊襲魁帥の二女を幸し、其の姉市乾鹿文の献策に依り、魁帥を殺して、之れを平げたが、天皇は市乾鹿文の不孝を惡みて、之れを誅し、妹市鹿文をもつて、火の國の造に賜つたといふことが、歷史に殘つて居る。

其の後ちも功臣に美女を下されたことは多くあるが、最も人口に膾炙したのは、烏羽天皇が其の寵臣平忠盛に、其の幸するところの、祇園の女御を賜つたことである。尤もこれは忠盛が既に、密かに女御と通じて、懷姙の身となつて、居た爲めもあるだらうが、無二の寵臣でなければ、法に依つて、死罪にも處せらるべきところを、

彼の女の孕める子、若し女ならば朕之れを取り、男ならば卿之れを取れと、有難い詔に接して、忠盛は夢かと許り喜んだのは、無理もない。やがて月満ちて、生まれ落ちたのは男で、忠盛は晴れて、自分の子としたが、これこそ平家の大立者清盛その人である。

次ぎは源三位頼政が、怪獣を射止めたる恩賞として、時の帝より二人の美女を賜つたのは殊勲者に對する恩賞と吾人は思ふのである。それから木曾義仲の愛妾巴御前が、義仲の戰死後、和田義盛に生擒られたが、義盛はその武勇と美とを愛して、之れを宿の妻に申請けたのも、此の愛と看て大誤はなからうと思ふ。

これもみな人の熟知するところであるが、新田義貞が、御醍醐天皇より勾當内侍を賜はつたのも、義貞の大功に愛でた恩賞でなくて何であらう。史の記するところに依れば、天皇は義貞が内侍を戀へる心情を、憐れに思召し、義貞を召して内侍を賜ふたといふことである。けれども義貞が體を捨てゝ帝難に赴むき、一擧にして兇賊を倒滅

した功績があればこそ、斯かる恩命に接することも得たのである。

御村上天皇が、楠正行に勅して、弁内侍を賜はらんとしたのも、これと同一で、功臣に美女を賜ふの例は、一國一城に封せらるるよりも、其の名譽は大なるものであつたゝめとは、次ぎの俚謠でも判明する。

ソ君と寢ふか五千石取ろか、
何の五千石君と寢る

其頃は、比較的に女子の品位は高くして、女子をば擄はつた時代であつたに拘はらず、一方には、武人勇士の玩弄となつた、之れを慰藉するのを、其の身の勤めとしたのは、偏へに男子の色慾が旺盛で、殆んど節制の度が、無かつたに因るのである。それで奸雄足利尊氏の家臣に、高兄弟（師直、師冬）の如き、好色の武士が現出して、公卿の姫を奪ひ、或ひは人の妻妾を誘惑して、憚りなく横暴を振舞はすに至つた。

人の妻女を奪つて、之れを自己の妻妾とした戰國時代の風習は、之れが爲めであ

る。平相國清盛は、故人の妾を納れて、寵愛限りなく、機山信玄も、又故人の女を奪つて妾としたことは、人の知るところである。

此の外敵人の妻妾を奪つて、寵愛したものゝ例は、數多くあるが、これは尙恕すべきである。若しそれ君にして其臣下の妻妾を奪ふに至つては、人道を無視するの甚だしきものと謂ふべきである。例へば源頼家が、其の臣安達景盛の妾を奪つて、景盛を遠ざけたる如き、或ひは關白秀次が、美女を網羅する爲めには、如何なる惨虐をも辭せざりし如きこれである。

箇樣にして、美女麗姫を爭ふ結果は、兩者の角執となつて、格鬪又は戰亂の基となつた例は少くない。

それはさて秀次が、數十の妻妾を寵したのは愛したのではなくして、單に色慾の犧牲に供じたのである。ソロモン王の如き、賢明なる主君も、後宮に三千の麗花を植ゑて、朝夕の眺めとしたのは、只管其の色を愛づる爲めであつた。斯くして後世のマホ

メットや、モルモンをして、其の典型を茲に仰ぐに至らしめた。

支那の秦始皇も、亦ソロモンと同じく、三千の美人を養ひ、阿房宮をして、不夜の淫樂城と化せしめたのは、洽ねく人の知るところである。

野蠻人の酋長中にも、多くの妻妾を有するものゝあることは、前に述べたところで、彼れ等は之れを寵するけれども、毫も愛する心がないので、愛妾中に寵を失ふものがあると、惜げ用捨もなく之れを捨て、若しくは殺して顧みぬこと、さながら牛馬を使ふが如くである。

右の如く酋長が、其の妻妾を捨て、或ひは殺戮して顧みなかつたのに、二つの原因がある、第一は新候補者が出て、之れを容れたいにも、餘裕のない場合で、此の際は、舊妾中で、一番寵の少い者を出して、新候補を迎へるのである。

第二は老年になつて、妾色が衰へ或ひは病氣に罹かつて、見る影もなくなつた場合で、此の時は、他の新候補者の有無に拘はらず、隨時に之れを處分するのである。其

の無情も極まれりと謂ふべきである。

昔時大名、若しくは旗本などの抱へた妾の如きも此の類で、畢竟、色慾の犠牲に供せられたのである。徳川幕府で、男女間の不義に對する制裁を、甚だ嚴重にしたのは、表面人道を正す爲めといふけれども、内面には、異性に對する嫉妬心から、異性の愛他心を制せんとしたのも、含んで居たことは、推察するに難くはない。

それであるから大名、旗本の妾や、侍女などが、不義することでもあると、忽ち御家の法度を楯に、苛酷なる刑罰を加へたのである。

どこまでも女は、男の玩弄に甘んぜねばならなんだ。それで又、女は姿色さへ優れて居れば、意外の出世も出來たのである。斯くの如くして、女は、色慾の的となつて言ひ替へれば生殖作用に於ける誤用即ち遊戯作用の犠牲となつて、勢ひ其の美を就ふ樣になつたことは、次第に論ずるであらう。

第五節　性慾と女の美貌、肉的研究の範圍

上文に論述するが如く、女子は昔から色慾を滿たす、器械として、取り扱はれて來たが、色慾の的、即ち男を刺戟して、其の色慾を起こさしむる動機となるものは、女の容貌であること勿論であるが、是れと同時に、色慾が肉體の快美と、密接に關係して居ることを、忘れてはならぬ。

男が美人を見て、心に色情を想起するのは、美の刺戟に依つて、肉體に對する、快美の觀念を生ずるが爲めである。唯だ眼で見て、美人と思ふただけでは、色慾を滿たすことが出來るならば、美人繪を見ても、又は遊冶郎が吉原を素見しても、滿足が得られる理だし、畫家や彫刻家は、モデルに依つて、十分に色慾を滿たすことが出來るであらう。

尙、進んで意中の美人と握手し、接吻し及び抱擁すること、西洋ダンスの如き、際

どころまで行つても、これ又、未だ色慾は滿足せられたものと謂ふことを得ぬ。實際にこれだけでは、物足らぬのである。

日本では男女の握手、接吻乃至抱擁等をもつて、極めて猥褻なるものとして、夫婦の間柄でも、人の見る前で、公然と行ふものは無かつたのである。それで昔時にあつて、斯かることが、若し男女の間に、交換されたるならば、或ひは之れをもつて、其の色慾を滿足さしたかも知れぬが、併し今日では西洋風俗の輸入以來これ位のことは普通で、西洋では、接吻や、抱擁は、公然と男女の間に、交換されて居ることは、活動寫眞で、西洋の映畫を見れば、直ぐに判明る。

して見ると色慾の焦點は、肉體中の或る一部にあつて、之れを除いては、他の部分に觸れ合ふとも、滿足することは出來ぬものである。

日本人の思惟した男女の外的抱擁も、接吻も、未だもつて情を竭くすに足らぬことは、明らかで、此の局部といふのは、即はち生殖器のことである。

併し如何に、色慾の焦點が、生殖器にあるとしても、其の生殖器ばかりで、十分に異性を刺戟することは出來ぬ。何となれば醜婦、醜男では、之れに對しても、色慾が起らぬからである。例令ひ色慾の焦點たる局部を、目睹し、又之れに觸るゝとも、容易に其の心を動かすことは、出來ぬからである。

之れに反して其の容貌が、妖艶にして、嬋娟たる花の如くなる時は、唯だ其の顏を見ただけで、十分に其の色慾を想起するのである、假令ひそれ程でなくとも、普通の婦人ならば、同樣である、況して斯かる美人の肉體を見、或ひは之れに觸るゝに於いてをやだ。

そこで婦人の容貌は、單に刺戟に止まるものとはいひながら、色情を想起する上に於いて、至大の勢力のあるものなることは、言ふまでもなく、實に容貌は婦人の生命である。婦人が化粧に憂き身を窶すのも、決して無理はない。否なこれは、婦人としては、極めて必要なことで、爾かせざれば、婦人は生存上、幸福を得ることは難しで

ある。

徒らに婦人を、虚榮の權化と嘲ること勿れだ。婦人は美しく其の肉體を飾るのは、謂はゆる身嗜みで、此の性能は、先天に持つて生まれたのでる、虚榮の爲めに、身を誤まるものゝ如きは、其の身嗜みを、過度に及ぼした結果で、普通の身嗜みは、俙めても、奬勵したいものと、吾人は思ふのである。しかし所謂身嗜の半面、前處に彼等を動かす力のある「生」が潜んで居る。

今茲に、三種の婦人があつたと假定せよ。第一の婦人は才藝ありて、怜悧なるもの、第二の婦人は、學問があつて、見識の高いもの、而して第三の婦人は、容貌美はしくして、其性優しくある。此の三婦人に就いて、其の望むところを選べといふものならば、吾人は第一の婦人よりも、寧しろ第三の婦人に向つて、握手せんと欲するのである。これ何故なりや、左に少しく其の理由を述ぶるであらう。

今日社會で、用ひるだけの學問や、藝術や、其の他の事業は、みな男の手で蒔かれ、

育てられ、收穫せられたもので、女の手を藉る必要のあるものは、子を生むことゝ、子を育てることゝ、家政を整理することゝの外には殆んど何もない。吾人が婦人に望むところのものは、そんな高尚な學問や、藝術でなくして、それよりもわれ〳〵が、社會の戰場で働いて、疲れて家に歸つて來たときに、温情をもつて慰めて呉れるのが、何よりも難有いので、われ〳〵は唯だ之れに向つて、感謝するのである。

われ〳〵が婦人に對して希望するのは、全く唯だ此の一事で、學問も、藝術も、卓越するに及ばぬ。婦人は結局は、男子の慰藉者であることを忘れてはならぬ。呉々も忘れてはならぬ。

斯く叙し來たつて考ふると、婦人の肉的研究の必要が、判明るであらう。其の美なる肉體は、男子の目を悦ばしむる爲めに、發達したもので、女の肉體の、男のそれと大に異なつて居る理由も、推知せらるゝであらう。これ決して、妄論でない。

さて女の肉的研究に於いて、吾人の指を染むべきものは、何であるか。先づ其の範

圖を挙げて見やう。

第一は、女性の體格に關することである。體格といへば、外形上のことも、內部のことも悉皆を包含して居るが、茲に謂ふ體格は、內部を除いて、外形に關する一般的のもので、之れを區別すると

一 外形
二 身長
三 體重

の三部となる。

第二は、女性の發育、及び成長に關することである。これは生まれてから、成長するまでの變化で、一定の時期がある。即ちち

一 嬰兒期
二 幼兒期
三 兒童期
四 少年期

五 青年期
六 初老期
七 老年期
八 高年期

で、學者に依つては、之れを三期、五期、著しきは七期等に別かつものもあるけれども、前の分け方は、一番適當して居つて、之れを用ひる人が多い。

第三は、女性の體質に關することである。此の中に

一 體質
二 素性
三 女らしい女
四 男らしい女
五 成熟の女
六 若らしい女

がある。

第四、女性の發情期に關することである。破瓜期とは、謂はゆる春機發育期の謂ひ

で、婦人に取つて、最も大切な時期である。

第五は、月經に關することである。これ又大切なる現象で、之れに

一 初經期
二 終經期
三 月經異常

の三種ある。

第六、女性の生殖器に關することである。これ第一性的器關として知られたことで、其の男性とを區別するには、之れに依らなくてはならぬ。其の構造は、頗る複雜であるが、大別すると、

一 外生殖器
二 内生殖器

との二部となる。

第七は、女性の皮膚に關することである。皮膚には、種々の附屬物もあるが、次ぎの如く分けるのが便利である。即ち

一 皮膚
二 體毛

これである。

第八、女性の脂肪に關することである。脂肪は婦人に缺くべからざる要素で、すべての婦人は、みな先天に脂肪に富んで居る。此の脂肪に依つて、婦人の肉體は美しくなり、精神的には感情を表はし、其の性は優しくなる。

第九は、女性の臀部、及び腰部に關することである。婦人の臀部の大なるものは生殖上の必要から來たもので、腰の太いのも同樣であるが、一方に於いて、此の部分は美の標準となる。併し人種に依つて、種々の習慣がある。

一 臀部
二 腰部

第十は、女性の脚に關することである。之れも美の標準となるもので、支那婦人の如く、纏足を賞するものもあれば、我が國婦人の如く、内轉足を美とする人もある。

第十一は、女性の胸部に關することである。胸部には乳房がある。これが此の問題となるのである。

第十二は、女性の頭部に關することである、頭部は頭顱と、顏面とより成り、而して頭顱には、髮を生ずるに依り、次ぎの三種に分かたるゝのである。

一 頭
二 髮
三 髮

第十三は、女性の音聲に關することである。音聲が男女に依つて異なるのは、聲帶に關するので、音聲を論ずるには、聲帶に溯らなくてはならぬ。

第十四は、女性美に關することである。婦人美には、種々の要素があつて、それが旨く配合して、初めて美人といはれるのである。例へば顏ばかり美しくても、姿勢がよくない時は、美人と行かぬが如きことである。又、美人の見方は、人種に依つても異なるし、種々の條件もあるが、要するに美人には、一定の標準があるのである。

第十五は、女性の疾病に關することである、婦人の疾病には、男子と同じく種々あるが、茲にいふのは、男子にはなくて、獨り婦人に許りある病氣のことである。即ち婦人病のことで、主に生殖器に關するものである。

* * * * * * * * * * * *

婦人の肉的研究の範圍として、以上の十五大要目は、女子を本位とすること勿論であるが、女子は男子と相對的のものであるから、女子も男子から離して、單獨に論ずる訳に行かぬ。例へば身長にしろ、體量にしろ、すべてが男子と對象して、之れを比較した上で、結論を求めねばならぬ。

そこで男女を對象して、其の差を發見するに、二樣の方法がある。第一は科學的差異で、他の一は統計的差異である。科學的差異は、生殖器の如く、根本から異なるもので、女の乳房も此の一種である。統計的差異は、廣く統計を取り、之れと比較して、

初めて判定せらるゝものである。例へば身長、體量等の如きもので、此れ等は外觀上多少明かであるけれども、精細に其の差異を發見するには、必らず統計を取つて、之れと比較しなくてはならぬ。男女に於ける血液の性質、呼吸及び脈搏の數、筋力、もしくは感受性等の如きも、同樣で、何れも統計上の差異である。

右は統計的の差異を、發見する方法として、一例を示したのみであるが、此の對象に、又絕對的の比較と、對比的の比較との別あることを知らなくてはならぬ。

絕對的比較とは、或る部分の比較に就いて、之れと關係のある他の部分には頓着なく、唯だ其の部分のみを比較することである。例へば女子の腦は之れを男子に比すれば、輕いといふか如きこれである。けれども女の腦の輕いのは、身體の小なるが爲めで、他の部分との割合から、來たものでないから、眞の比較とはならぬ。

對比的比較とは、前者と異なつて、他の部分、或ひは標準となるべき點との割合から打算するもので、比較としては最も完全である、例へば前に示した腦に於いて、女

の腦は、男より小なれども、之れを身長、體量等と比較するときは、却つて男子よりも、大となるが如きである。對比的比較とは、之れである。

他の部分に於いても、同樣で、絕對的比較と、對比的比較とは、往々反對の結果を呈することがある。科學上では、後者は必要である。

本論

第一章　女性の體格

第一節　外形

男女の體格を比較して見るに、其の差異の最も著しいものは、外形である。內部の構造に於いても、多少の差はあるけれども、體內の差異は、解剖の上でなければ、認知することは出來ぬが、外形の差は、何人も一目瞭然として、知ることが出來る。

勿論、男女は、もと同一の模型に嵌められて、構成せられたものであるから、差異といふのは、畢竟は程度の問題で、根本的に異なるものは、唯だ生殖器のみである。

先づ解剖的に、男女の外形を大別すると、次ぎの三部となすことが出來る。

一　頭部

二　胴部

三　四肢

第一項　頭部

頭部の大小は、男女同じからずして、女子は割合に大きく、小兒は最も大きくある。これは四肢の十分に伸長せざる爲めで、男子でも短小のものの頭は、割合に大きくある。

顏面と頭蓋との境界、即はち毛生際は、男女に依つて異なり、男子の毛生際は、多く直線である。日本では富士形になつた額は、婦人の美とするところで、男の毛生際に眉毛から遠ざかり、女の毛生際には、眉毛に近よれるものが多い。

何ういふ理由で、男の額は廣く、女の額は狹いかといふに、これに次ぎの三原因がある。

一　男子の大腦は、女子よりも能く發達して居ること。

二　男子は腦を使ふこと、女子より烈しいこと。

三　女子は頭髪をもつて、裝飾とする故に、成るべく額を狹くすること。

男の額の廣いのは、如何にも男らしく、寧ろ、大度量を示し、女の狹い額は、女らしくて、美である。

次ぎに下顎では、男は大にして、女のは短小である。これは男の咀嚼が女よりもよく發達して居る爲めで、女には顎の短いものが多い。

眉毛では、男のは太くして屈起し、女の眉毛は細く弧形を描いて、謂ゆる新月形なるものが多い。是れは先天性でもあるが、一つは裝飾にも依るのである。

日本人の鼻は、謂はゆる蒙古型で、西洋人に比すれば、低くて鈍圓をなして居る。男もさうではあるが、特に女の鼻はさうである。けれども對比的には、女の鼻は高く、鼻柱の中央に、節のあるものが多い。此の節なるものは、鼻骨端と、鼻軟骨との接合部で、節の高いものは、鼻骨が高い爲めである。之れに依つて、女子の鼻骨は、

比較的高いことが知れる。

女には男の如く、鼻下、口圍及び頤下に、鬚髯がない代りに、頭髮に長い毛があつて、唯一の裝飾となる、此のことは後章に詳述するであらう。

第二項　胴　部

胴部が亦、其の位置に依つて、

一　頸
二　胸
三　腹

の三部に分かれ、其の形は男女に依つて等しくない。

男子の頸は、太く長くして、喉頭は著しく突出するけれども、女の頸は細く、長く、且つ其の喉頭は、男の如くに突出することはない。これは女の甲狀軟骨は、男のそれの如く前方に突出しない爲めである。

胸は胴の最上部で、更に

一　肩
二　肋
三　背

の區別がある。

肩は上肢と、胴との連接するところで、男の肩幅廣く、且つ角張つて聳ゆるけれども、女の肩は狹くして、謂はゆる撫形である。特に西洋婦人の肩は、優しくして、首筋から斜めに肩に連なつて、稍々三角形を爲して居る。然るに日本婦人の肩には、山肩即はち怒り肩が多くして、優しくない。

胸の前面には、左右一對乳房があつて、女の乳房は肥大であるけれども、男の乳房は、微小で痕跡を止むるに過ぎぬ。

次ぎに肋は、男は廣く、女は狹い。これは女は、常に幅の廣い帶をもつて、肋を擧縛する爲めである。西洋婦人の如く、コルセットを用ひるものは、特に細狹である。

背も、女には特有なるもの即はち猫背なるものが多い、これに二原因がある、即、

はち

一　女の骨盤の大なること。
二　女は幅廣の帶を用ひること。

である、骨盤の大なることは、西洋の婦人も同樣であるけれども、猫背の特に日本婦人に多いのは、幅廣の帶を背の上で結ぶので、背の上に物を負ふと同じく、勢い胸は前方に突き出でゝ、背は後方に屈するからである。

日本婦人に、脊椎彎曲症の多いのも、これが爲めで、下流社會よりも、寧ろ上流社會に多くある。

腹の下肢に移るところは、即はち腰で、其の後ろは臀である、此の兩者は、女は男よりも大にして、男は腹部及び臀部とも、挾少である、斯くの如く女の腰の大きいのは、骨盤の大なる爲めで、分娩の必要から來たのである。

第三項　四　肢

四肢とは

一　上肢

二　下肢

の總稱で、兩者は共に、女は男よりも短少である。

上肢は、更に

一　上膊

二　前膊

三　手

の三部に分かれ、長さ及び形とも、男女異なるところがある。前者は骨の關係で、後者は筋肉及び脂肪の關係である。男子は筋肉發達し、女は脂肪に富んで、筋肉が少なき結果、膊は圓筒形を爲して、强く肘を屈しても、男の樣に、力瘤の生ずることはない。

下肢も亦

一　大腿

二　脚

三　足

の三部に分かれ、其の肉附きの狀は、上肢と同じである。女の腿は肥大に兩足を接すると、左右が密着して、水も漏らさぬといふ狀態であるけれども、男は脚を揃へても、腿間の空隙の、塞がることはない。

足には、直立の際、爪先きの內方に向ふものと、外方に向ふものとある前者謂はゆる內輪足で、後者は外輪足である、西洋人は一般に外輪足であるけれども、本邦人特に婦人には、內輪足なるものが極めて多くある。

內輪足は、骨盤の廣いのと、腿の內向とに關するもので、日本婦人は、人爲的に養成した傾きがある。

第二節　身長

男女の區別の中で、最も明かに、人の目に着くものは、身長である。足長とは足蹠の接する、地平線上から、頭頂に達する距離で、之れを測るには、兩足を揃へて直立せしめ、腰の關節及び頸を十分に伸ばして、測るのである。

身長は人に依つて異なり、長大なるもの、矮少なるもの等一樣でないけれども、同人種又は同種族の間に於いは、概ね同一の身長を有するものである。例へば日本人の身長は、最高五尺七八寸で、最低は四尺五六寸であるから、之れを平均すると、五尺二寸となるが如きこれである。支那人や、朝鮮人や、安南人、暹羅人等も、略ぼ同樣で、平均は五尺二三寸である。

然るに英國人は之れと異つて、最長は六尺五六寸で、最低と雖も、五尺一二寸を下らぬ。之れを平均すると、五尺六寸で、日本人よりも高いこと、四五寸である。身長で四五寸の差といへば、實に大したもので、丁度大人と、小兒と並んだやうである。

獨逸人、佛蘭人、西班牙人、露西亞人等、伺れもみな日本人よりは、長大な人種で

ある。

斯くの如く、各人種に依つて、異なる身長の差を、人種的身長の差異といふ、個人々々に依つて異なり居る、個人的身長の差と稱するのである。

人種的身長に於いても、特に又、個人的身長に於いても、規則的に必らず異なるものは、男女の身長である。何れの人種、若しくは種族に於いても、男は高く、女は低く、其の差は一定せぬけれども、男の女より高いのは、規則である。

之れを各國人に徵するに、英吉利人にあつては、男の身長は、平均一七〇センチメートルにて、女の身長は、平均一六〇センチメートルである。それで其の差は一〇センチメートルで、男の身長を一〇〇とすると、女の身長は九四・一即はち女は、男より低いことは、約百分の六（六分）となる理である。

白耳義人に於ける男女身長の差も、英吉利人と同じで、男の一〇〇に對する女は、九四・一である。佛蘭西人の差は一二センチメートルで、米國人の差は、一三センチメ

ートルである。

斯く西洋人に於いて、男女の身長の差の、ほぼ一定して居るのは、注意すべきところである。

日本人に於ける男女の身長は、明治生命保險會社の調査に依ると、年齡二十一歲乃至二十五歲の男子二千二百三十一人の平均身長は、一五八・九九センチメートル

で、同年齡の女子、三百六十人の平均身長は、

一四六・六四〇センチメートル

である。故に其の差は、一二・三五センチメートルで、一〇〇に對する九二・二の比例となる。

更に年齡

二十六歲、乃至三十歲なる男子、三千七百七十二人の平均身長は、一五九・六九センチメートル

で、同年齡なる

女子三百七十四人の平均身長は、一四七・〇八センチメートル

である。故に其の差は一二・六一センチメートル、即ち一〇〇に對する九二・一となるのである。

斯くの如く男女が、年齡の進むに從つて、其の差の增加する傾きあるのは、何ういふ理由であるかといふに、これに次ぎの二原因ある。

一　男子の發達の遲いこと

二　女子の發達の早きこと

之れを換言すると、男子は晩熟で、女子は早熟といふことになる。女子は發情期の終りまでに、十分に成長して、その後ちは停止するけれども、男子は然らずして、二十六歲以後、尙成長するから、右の樣な結果が生ずるのである。此のことは次章に於いて詳述するであらう。

さて、上文の如く、男子の身長に大なる差のあるのは、如何なる理であるかといふに、之れに次ぎの二原因がある。

一　下肢の長短

二　胸部の長短

そも〳〵身長の大小は、下肢と胴部との、長短に關するもので、下肢の長大なるものは、隨つて身の丈高く、之れに反して、下肢の短小なるものは矮小である。之れを言ひ換へると、下肢の長短は、身長の差を生ずる、原因となるのである。

そこで下肢は、男女に依つて如何に異なるかといふに、男の下肢は、胴に比例して長いけれども、女の下肢は、之れに反して居る。今、軀幹の長さを一〇〇として、男女の割合を取つて見ると、

男は一〇〇に對して、約一〇〇

女は一〇〇に對して、約九九・七

である。即はち男は、胴と下肢と、幾んど等々であるが、女の下肢は胴よりも、短いのである。

斯くの如く、男の下肢の長くして、女の下肢の短い理由に就き、更に一考するに、面白い理由の含まれてあることが判明る。要するに男は、平素家外にあつて、働く爲めに、自然下肢の發達を促したけれども、女は常に家内に在つて、下肢を働かすことが少い爲めに、下肢は發達せぬのである。それればかりでない、女は姙娠の爲めに、大なる胴を要するものも一つの原因で、下肢は伸びないけれども、胴の方は發達したのであると信ずることが出來る。

第三節　體量

如上の身長に次いで、男女の差異を呈するものは、身體の重さ、即はち體量であるけれども體量は、身長と違つて、目で見定めることは出來ぬ。必らず量りにかけて、

計つて見なければ、重いとも輕いとも、知ることは出來ぬ。

多少目標でも、重さうな人とは、判明るものであるけれども、これはホンの見積りで、當てにはならぬ。それで重さうな人が、却つて輕かつたり、輕さうな人が、案外に重かつたりすることがある。其の輕さうで重いものは男で、重さうで輕いものは女である。

それで精密に、男女の體量を計つて見ると、人に依つて種々であるけれども、概して男は重く、女は輕くある。故に見かけの大きな女と、少さい男とを計つて見るときは、矢張男は重く、女は輕くある。之れを平均して見ると、其の差は、男の約一〇〇に對して、女は八七・四である。

明治生命保險會社で、調査した結果に依ると、二十一歳から、二十五歳までの男女の體量は、平均

男は、五二・三五キログラム

女は、四六・二三キログラム

で、二十六歳から、三十歳までの男女の體量は、平均

男は、五二・九九キログラム

女は、四六・二九キログラム

である、今、之れを平均すると、

男は、五二・六七キログラム

女は、四六・二六キログラム

で、其の差は、六・四一キログラム、即はち日本の目方で、一貫七百十一匁五分である。西洋でも一般に、男は女よりも重く、其の差は一〇〇に對する、八〇乃至八七の比例である。

右の如く女子の體量は、絶對的に男子より輕いのみならず。其の身長との比例に於いても、女子は男子よりも輕いのである。今、之れを百分比例に換算して見ると、身

長一五九・三四センチメートルなる男子の體量は、三二・五キログラム、で一四六・八六センチメートルなる女の體量は、三一・七キログラムであるから、女は對比的には亦、男より輕く、其の差は男の一〇〇に對する九七・五である。

斯くの如く、男女の體量に差のあるのは、如何なる理に因るかといふに、これには次ぎの二事情がある。

一　身長に對する差

二　筋肉と脂肪との差

身長に對する差は、前節に述べた如くであるから、茲には筋肉と脂肪との割合を、説明するであらう。

筋肉と脂肪との割合は、男女に於ける體量の差を、生ぜしめた主原因であるが、此の二つのものは、男女に依つて、如何に異なるかといふに、

男は脂肪よりも、筋肉の方が發達し、

女は筋肉よりも、脂肪の方が發達す。

といふことが、男女の體量に、差を生じた主原因である。他の語をもつて言ふと、男は筋肉の塊りで、女は脂肪の塊りといふことも出來る。

男の身體は頑丈で、皮膚の硬いのは、全く筋肉の發達せる爲めで、女の肌の滑かで、且つ柔かなのは、脂肪に富んで居るが爲めである。脂肪は主に皮膚の直下と、筋肉の上層との間に、蓄積したもので、脂肪の多いものは、少ないものよりも肥大で、美術家の謂はゆる曲線美を呈するものである。小兒の肥て、太つて居るのも脂肪が多いからで、小兒の肌は女の肌と同じである。

第二章　女性の發育及成長

第一節　小兒より成年に至るまで

發育及び成長に於いても、女は男と異なるところが多い、精密な調査に依ると、男女は胎兒のときから、既に異なつて、分娩のときは、男兒の身長は四九・一センチメートル、其の體量は三〇・四キログラムで、女兒は四八・四センチメートル、體量は二八・五キログラムである。

西洋に於いては、アラツセル氏に依ると、初生の男兒は一フート八インチ四分の三で、女兒は一フート九インチ三分の一である。ロベート氏の調査も之れに近く、初生男兒の身長は一九・五インチ、體量は七・一ポンドで、初生女兒の身長は一九・三インチ體量は六・九ポンドである。兩者ともに其の差は、僅少ではあるが、男兒の方は女兒よりは、大きく且つ重くある。分娩の際、男兒なるときは、女兒であるときよりも産婦の難産するのは、之れが爲めである。

斯くの如く男兒は、生まれながらにして、既に女兒より長大であるのみならず、從來の發育も、男兒は一般に佳良で、早晩女兒を超えて增加し、壯年に達するまでに、

著しい差を生ずるに至るのである。

けれども發育中に、唯一時期、女の男よりも大きいことがある。それは十二三歳の時で、此の頃だけは、女兒は男兒を超過して大きく、且つ重くなる、其の事實は、次ぎに述ぶるであらう。

三島醫學博士の調査に依ると、體量に於いて、小兒の最も速かに增加する時期は、男兒は、

生後の三週間目、二ケ月目、及び、四ケ月目

で、三週間目までは、

毎週平均五十四匁づゝ

一ケ月目より六ケ月目までは、

毎月平均百五十二匁づゝ

增加する割合である。而して七ケ月以後は、漸次減少し、十月、十一月及び十二月の

三ケ月間は、最も僅少で、此の六ケ月を平均すると、毎月の増量は、八十五匁八分、即はち前半期の、殆んど二分の一に過ぎぬのである。

「二歳以後も、一般に緩徐で、八歳までの七ケ年を平均すると、毎年の増量は、三百八十四匁七分に減ずるけれども、九歳から再び速となつて、十四歳、十五歳の如きは、二貫四百目近く増加す。

其の七ケ年の平均増量は、毎年七百四十六匁九分で、前者の八倍である。

然るに女兒の發育は、較々男兒と異なつて、其の最も迅速に成長する時期は、生後の二週間目、二ケ月目、及び三ケ月目で、其の増量は、男兒の上に出づるけれども、四ケ月目からは漸々減少し、七ケ月目に至つて再び昇り、

八ケ月目にまた減少するのである。而して九ケ月目には、少しく昇り、それからは又

下つて、十二ケ月目は、最低に達するのである。

此の事實を平均數で示すと、初週から三週までの平均は、

毎週五十七匁七分

一ケ月目より六ケ月目までの平均は、

毎月百三十三匁三分

の割合で、男兒より劣るけれども、七ケ月目から十二ケ月目までの平均は、」

男兒より優つて居る。

これは七ケ月目と九ケ月目との、著しい増加に因る爲めである。

二歳以後に於いても、男兒より稍々多く、八歳に至るまでは、

七ケ年の平均は、三百八十八匁六分

である。九歳及び十歳は、男兒より少なく、十一歳から再び増して、」

十二歳、十三歳及び十四歳

の三ヶ年間は、全く男兒を超越するに至るのである。此の時期間に於ける女兒の發育は、驚くべき程で、體量のみならず、身長、顏面、胸圍等も、みな男兒より優るのである。

それで更に、身長上から、男女兒を比較すると、面白い。身長の發達は概ね體量と併行するけれども、身長の增加は、常に體量の增加に先だつて、來るものの樣である。即はち、

男兒は、分娩後の三週までは、女兒よりも、多く伸長し、

女兒は、一ヶ月目から六ヶ月目までに、男兒を超え、

男兒は、七ヶ月目から、十二ヶ月目までに、女兒を超過するのである。

二歲から八歲までも

男兒は女兒より、多く成長し、

女兒は九歲より、十五歲の間に、男兒を超えて成長するのである。

それから體圍であるが、分娩後の三週までは、男兒も女兒も同一で、一ヶ月から十二ヶ月までには、男兒は女兒を超え、二歲以後は、女兒は男兒の上に出づるのである。

又胸圍は、生まれてから、一般に男兒は、女兒を超えて伸長し、九歲以後に至つて、女兒に追ひ超さるゝのである。之れを要するに、

女兒は、初生より十一歲までは、一般に男兒の下にあるけれども、十二歲から、十四歲の間に、長足の發達をなして、一時男兒を凌駕するに至る

のであるが、

男兒の發育は、十五歲以後にある。

以上は、三島博士の調べに基づいたのであるが、三輪醫學博士の調査した結論に依ると、

女兒は十歲までは、男兒より輕いけれども、十歲から十一歲の間に、著しく成長して、男兒よりも重くなり、十四五歲で男兒に追ひ超さるゝ後ちは、常に男兒の

下となる。

久しく日本にあつて、日本人の體格を調査した、獨逸のペルツ博士は、恁ふいふ結論を爲した。

男兒は九歳までは、女兒より重く、女兒は九歳から十歳の間に增加して、男兒の上に出で、十五歳で男兒と等しくなり、十六歳再び重くなるけれども、男兒は十七歳以後、常に女兒の上にある。

參考の爲めに、歐洋兒童の發育に關する、諸家の說を示すと、多少の差はあるが、大體に於いて日本の兒童と似て居る。

英國のロバート氏に依ると、男兒は十二歳までは、女兒よりも重く、女兒は十二歳から、十三歳の間に、男兒を追ひ超して、八三ポンドに對する八七・二ポンドとなる、斯くて十五歳までは、女兒の方が重いけれども、十五六歳で男兒に追ひ超され、其の後は、常に男兒の下にある。

身長も之れと併行して、女兒は十二歳まで、男兒より低いけれども、十二三歳の間に之れを追ひ超して、五五インチに對する五五・七インチとなる。男兒は十五歳から、十六歳の間に、女兒より高く、其の後は、常に此の比例で進行すと。

右の外、獨逸のコーテルマン氏、瑞典のアクセル、キー氏等の調査もあるけれども、其の成績は、ロバート氏と大差がないから、茲には略することにした。

さて、是れまで說き述べて來た事實に依つて考へて見ると、男女兒の發育に、一定の法則の存することが、知らるゝであらう。此の法則を、吾人は成長の週期律と名づくるが、日本人も、西洋人も、此の法則の支配を受けて、發育することは同一である。左に之れを約言するであらう。

男兒は分娩後、四五ヶ月目で分娩當時の、約二倍の重さとなり、十二ヶ月目で約三倍、五六歳で約五倍、十四歳で幾んど十倍となる。

けれども女兒の成長は、是れより少しく早く來るので、男兒よりも年の行かぬ中

に、男兒に追ひつく理であるが、十五六歳からは、成長緩漫となり、十九歳乃至二十二三歳で全く成長を止むるのである。

然れども男兒は之れと異なり、其の最も多く發育するのは、十六歳以後で、全く其の成長を停止するのは、二十四五歳の頃で、女よりは遲くある。

尙、男女の最大量に達する年齢は、三輪博士に依ると、男子は、三十八歳で、女子は三十一歳である。

第二節　早熟と晩熟

前文の事實に依つて、考へて見ると、男子は晩熟で、女は早熟であることが、明らかに判明る、それは女は、男に比すると老けて、同年齢の男女では、女は男よりも三つ四つも年上であるかの樣に見えることは、何人も承知するところである。故に夫婦として似合ひの男女を配するには、是非とも男は、女よりも年上で、女は年下でなく

てはならぬ。

そんなことから、早婚の夫婦は、中年に至つて、似合はなくなることがある。それは十代で結婚するのだから、假りに男が十七八歳とすれば、女は十五六歳でなければならぬ。その頃ではそれでも宜いが、男が三十にもなると、二つ三つ下の女では、男よりも老けて見えるから、女は悲命になつてお化粧でもしなければならぬ有樣となる。況して同年の夫婦では、女が老けて居るのだから、男の方が年が多いやうに見られるのは、無理もない。

獨逸の或る學者が、男女の相一致する、相當年齢を定めたのは、此の理に依るのである。左に其の相當年齢を擧げて見やう。

男子	女子
一歳乃至三歳	一歳乃至三歳
五歳	四歳
六歳	五歳

六歳
七歳
八歳
十歳
十一歳
十二歳
十三歳
十四歳
十五歳
十六歳
十七歳
十八歳
十九歳
二十歳乃至二十一歳
二十二歳
二十三歳
二十四歳
二十五歳
二十六歳

七歳
九歳
十歳
十二歳
十三歳
十四歳
十五歳
十七歳
十八歳
二十歳
二十二歳
二十四歳
二十六歳
二十七歳
二十八歳
三十歳
三十二歳
三十四歳
三十六歳

二十七歳
二十八歳乃至三十歳
三十一歳
三十二歳
三十三歳
三十四歳
三十五歳
三十六歳
三十七歳
三十八歳
三十九歳
四十歳
四十一歳
四十二歳
四十三歳
四十四歳
四十五歳乃至四十七歳
四十八歳
四十九歳

三十八歳
四十歳
四十一歳
四十二歳
四十三歳
四十四歳
四十五歳
四十六歳
四十八歳
五十歳
五十二歳
五十四歳
五十六歳
五十八歳
六十歳
六十一歳
六十二歳
六十三歳
六十四歳

右の表に依つて見ると、女子は七八歳から、四十三四歳までは、累年其差が大となり、四十五六歳からは、稍減じ、それから老年に至つて、男子と同一となるのであるが、其の斯くの如くなるのは、全く早熟の結果で、其の差の最も多い年齢は、發育の最も速かな時期である。

それで或る學者は、法律上の丁年期を變更して、男子を滿二十二歳に、女子を滿十八歳と爲すべしとの說を唱へた。何故といふに、丁年を現今制度の如く、單に二十歳とするときは、實際に於いて、男女の間に、大なる不平等の生ずることがあるからである、其の男子の理由は姑らく置き、女子に就いて言ふと、次ぎの理由がある。

女子の下半期を、二十歳以前に、繰り上ぐる必要のあるのは、前に言へるが如く、女子は早熟で、其の二十歳は男子の二十六七歳に、相當するからである。之れに就いて次ぎの樣な例がある。

或る一婦人が、產婆試驗に合格して、其の筋から、產婆の免許狀を下附されたので、開業しやうと、手續に及ぶと、合憎く此の婦人は、未だ丁年未滿であつたので、開業することは出來なかつた。それで止むを得ず、丁年に達するまで、開業を待つことにした、といふことである。

立派に產婆の資格を有しながら、唯だ年齡が不足な爲めに、開業が出來ぬとは、何たる不仕合せであらう。幸ひに此の婦人は、丁年まで開業を延期するだけの、餘裕があつた人と見えるから、それでよい樣なものゝ、もし之れを生活の目的として、直ぐにも始めなければ、一家が立ち行かぬといふ樣な場合には、何とするであらう。此の間際になつて、急に職換へをすることも出來まいし、といつて、まさか年齡を僞つて、開業する理にも行くまい。結局は不幸と諦むるより、外に道はないが、之れは全く婦人に對する、丁年の不適當から起つた問題であるから、是れとも、此の丁年期を改めなければならぬ。

さうして斯くの如きは、啻に產婆のみではない。他にもこふいふ例が、多くあるであろう。それで今日にして、此の丁年期を改正しなければ、將來止むを得ず、執らなくてはならぬところの、女子の職業を妨ぐることは、少なくないだらうと、吾人は思考するのである。

之れに就いて、其の改むべき丁年期は、幾歳を適當とするかといふに、十七歳の說もあるけれども、十八歳ならば完全であらう。

第三節　女性の生活記

女子の容貌及び體格は、身體の成長に從つて變化することは、男子と同じで、此の現象は、みな人の知るところである。之れに依つて、婚人の各生活期中に於ける、容貌の變化を述べて見やう。

第一項　嬰兒期

これは生まれてから、凡そ乳齒の發生する頃までの間で、生後七ヶ月乃至十ヶ月間である。之れを草木に喩へると、丁度芽を吹き出した許りの時で、何の草であるか、本であるか判明らぬ。眞に人生の初期である。

それで此の間に於ける男女といふものは、殆んど同一で、外觀上では、區別の付かぬことが多い。即ち男女共に、

一　皮膚は極めて薄くして、初生の時は、紅赤色であるけれど、も漸くに白くなつて、綺麗になること。

二　初めは全身に、絨毛を密生するけれども、漸くに薄脫すること。

三　頭髮は絨毛に似て、柔かで短く、至つて疎なること。

四　脂肪が多くて、丸々と肥えて、可愛らしいこと。

等は全く同一で、他に異なる點がないから、生殖器を見ないでは、區別することが困難である。

第二項　孩　　兒　　期

此の時期は、乳齒の發生して、久齒と更換する頃、即ち六歳乃至七歳の間である。草木では、丁度双葉の時代で、草木の特徴が、少しく現はれたけれども、未だ〳〵不明瞭である。

是れと同じく孩兒期では、尙、男女の間に著しい特徴はないけれども、身體は男兒よりも、女兒の方が、割合に大きい樣である。性格は、兩者共に活潑で、初めは類似して居るけれども、漸くに差異を生じて、

男兒は、勇壯なることを好み、

女兒は、優美なることを好む、

傾きを生ずるに至るのである。

第三項　兒　　童　　期

此の時期は、久齒に換つてから、發情期に至る間、即ち十四歳乃至十五歳の頃

で、男女共に、固有の特徴を顯はすのは、此の時期から始まるのである。即ち

男兒にあつては、運動愈々烈しく、日光に晒さるゝこと多きに依り、

皮膚は黑褐色となり、筋肉は發達して力が強くなる。

女兒の運動は活潑ならず、その頭髮は伸長し、身體は脂肪を增して、

皮膚は一種の美を加ふるに至る。

右の變化は、年齡と共に益々著しくなるのである。

第四項　少　　年　　期

少年期とは、發情期から、身體增加の停止する時期、即ち二十一歳乃至二十五歳に至る間で、男女の形質は、茲に至つて愈々明白となるのである。其の主なるものは

男子に於いては、唯頭の膨大、音聲の變化、髭髯の發生等で、

女子にあつては、月經の初期、乳房の肥大、臀部の發達、頭髮の伸長、

肌色の艶美等、

である。草木には開花期の始まりである。

第五項　青　年　期

此の時期は、二十六歳から、四十五歳に至る間で、男女の、最も確實した時期である。草木では開花を終つて、實を結ぶ時代で、枝葉は盛んに繁つて居る。それで男女の區別を定めるには、前の少年期と、此の時期とに於いてしなくてはならぬ。

第六項　初　老　期

初老期は、四十六歳から六十歳に至るの間で、人生凋落の初期である。男子は脂肪減少して、多くは痩せ皮膚は水分を失つて、枯燥するに依り、皮面に多くの皺を生ず。此の皺は初めは細かであるけれども、漸々深く大となつて、遂に襞襞の樣になるのである。又、頭髮は漸々脫落して、禿頭となるに反し、髭髯は益々繁生すること、人の知る如くである。

女子の痩せて、皮膚の枯燥することは、男子と同じであるけれども、此の時期の初めは、月經の閉止期に至つて居るので、生理的に肥滿を來たして、一寸美麗となることがある。醫學上では、之れを初老期美人と名づけて居る。頭髮も男子と異つて、脫落することは少ない代りに、白髮は男子より多い樣である。

第七項　老　年　期

此の時期は、六十歳から七十歳に至る間で、皮膚の枯燥一層甚だしく、男女形貌は、再び類似を始むるのである。

第八項　高　年　期

高年期とは、七十歳以上のもの、總稱である。此の時期になると、男女の形容は、愈々消滅して、男子の髭髯と、女子の頭髮とを除いては、之れを區別すること、困難である。

第三章　女性の體質と稟性

第一節　女の體質は何んなもの

第一項　女の體質は强靭

體質とは、身體に固有せる性質を意味し、疾病又は壽命等と、大なる關係がある。體質は人に依つて一樣でないが、男女の上から言ふと、男には男の體質があつて、女には、女の體質がある。其の女の體質は、何うであるかと云ふに、大體次ぎの如くである。

一　女は移り氣が多い。
二　女は病氣に耐ゆる力が强い。
三　飢渴に耐ゆる力も强い。
四　觸覺は男よりも鈍い。

五　苦痛にも耐える。

これは女の體質であるが、其の根本は、一にある。即ち移り氣が多いといふことであるが、二以下の體質は、みなこれから起こつたのである。

之れを喩へて言ふと、女は松に絡む蔦蔓の樣なもので、纖弱であるけれども、見かけよりは强靭で、松の風に吹き折らるゝことがある樣に、風にも雪にも、倒さるゝことはない。それで或る人は、女は柔かで、剛情な人間だと言ふたが、實にその通りである。

第二項　女は病氣に耐ゆる力が强い

女は病氣に堪ゆる力が强いので、死にさうになつても、中々死なぬ。尤も病氣に苦しめられて、弱わることは、男よりも著しいが、粘精り氣が多い爲めに、脆くないだけ、生き延びるといふ理である。例へば肺結核に就いていふと、肺結核に罹つて、死亡するものは、女は男よりも常に多くして、男の一〇〇に對し、女は一〇八の割合で

あるが、其の死ぬまでの時間は、女は男よりも、長く時間を要するが如きこれである。

右に就き諾威で、肺結核患者男子九百五人、女一千一百人、總計二千五人に就いて、其の罹病時から、死亡時までの時間を調査したところが、平均三年と一ヶ月半で、女は男よりも、約一ヶ月長かつたといふことである。

獨り肺結核ばかりでなく、他の病氣に於いても、女は男よりも死に難い樣である。是れは全く、女は强靭で、病氣に堪ゆるからである。

第三項　女は飢渴に堪みる力も强い

女が男よりも、飢渴に堪ゆる力の强いことは事實である。女は蛋白質よりも、含水炭素類を嗜食するもので、粗食に甘んずるのも、詰りは飢渴に耐ゆる力が强いからである。

男は食事を樂みとして、あれかこれかと、美味い物を食べたがるものに女は勝手もとで、香の物一つで、サッサと片附けてしまう。世話女房となれば、經濟上の關係か

ら、さうしなければならぬこともあるが、家事に關係のない者でも、女となると、男の樣に食事を樂みにするものは少ない。尤も娘時代の、食ひ盛りでは、隨分食ひたがるが、それでも其の食物は、男の樣に牛肉だ、西洋料理といふやうな、濃厚味のものでなくして、極めて淡泊なもので、滿足して居る。

箇樣に女の、粗食に甘んずるのは、其の性分には違ひないが、本來は體質の然らしむるところと、謂はねばならぬ。

昔の貞女が、窮境に處した場合に、自分は食はないでも、夫や小兒には、何うやらかうやらして、口を糊さしたなどの例は、多くあるが、これは女のすべてを代表したもので、貞女ばかりでないと、吾人は信ずるのである。

第四項　女の痛覺は鈍い

男女の痛覺に對しては、種々の議論があつて、或る學者は、女の痛覺は男よりも、銳敏だといふ、或る學者は之れに反して居る。有名なロムブロゾー氏の研究に依る

と、女の觸覺は男よりも鈍くある。吾人も醫術上から、女の觸覺の鈍いことを證據立てるに、次ぎの事實を擧ぐるであらう。

第五項　女は苦痛にも堪える

男女の苦痛に對する、忍耐力に就いては、精密なる試驗も多くあるが、要するに女は、男よりも苦痛を忍ぶ力の、強いことは明らかとなつた。これは前に言つた如く、女は男よりも、觸覺が鈍い爲めでツリン氏及びデ、フイリツプ氏の、電氣を用ひた試驗に依ると、苦痛を感ずることは、男子の方が大きくあつた。

齒科醫マルチニ氏に依ると、齒の治療を爲すに當つて、女は概ね大なる勇氣を出してないといふことである、外科醫メラ、ビルロート氏に依るも、大手術に當つて、氣絶するものの多くは、纖弱き女でなく却つて堂々たる男子であると。何と意外なことではないか。それで分娩に於ける苦痛の如きも、吾れ〳〵男子が想像するが如く大なるものではあるまいと、言ふ醫者もある。

疾病及び創傷などの、恢復力に於いても、女の方が、男よりも早く癒るのは、痛覺が鈍いからである。語を換へて言ふと、負傷の早く癒るものは痛覺の鈍なものに多いといふことである。例へば下等動物は、高等動物よりも、早く傷が癒るし、野蠻人は文明人よりも、概して遠かに創傷が癒るの類である。

又、小兒の負傷が、大人よりも早く癒ることも事實で、小兒が少しの傷にも、大聲を擧げて泣くのは、痛みが烈しい爲めでなく、恐怖の爲めに泣くのである。さういふ樣に大騒ぎをする傷が、大人よりも早く傷つてしまうのは、痛覺が大人よりも、鈍い爲めであるといふことである。

此れ等の事實から、考へて見ても女の創傷が、男よりも早く癒る理由が推知せらることであらう。ルグーエー氏の四肢切斷に於ける、男女の比較に依ると、

男の四肢切斷者一千二百四十四人中、死亡せるものは四百四十一人なるに女の四肢切斷者二百八十四人の中死亡者八十三人

に過ぎぬ。之れを百分比例に換算すると、

男の死亡者は三五・四五

女の死亡者は二九・二九

である。斯くの如く男の死亡者の多いのは、偖の如何にも關するであらうが、其の主なる原因は、生來の恢復力が與つて力あるのである。

第二節　女性の稟性

第一項　稟性の意義及び種類

稟性とは、精神が體質の影響を受けて、生ずるところの一種の性質で、精神的體質を謂ふ方が、適當かも知れぬ。希臘人は之れを次きの四種に類別した。

一　多血質

二　膽液質

三　神經質

四　粘巴質

斯く希臘人が、稟性を四種に別けたのは、風、水、火、土の意味に基づいたもので、多血質は風で、膽液質は水で、神經質は火で、粘巴質は土としたのである。けれども此の區別は漠然たるもので、多くは混同して單純なるものは尠ない。

さて稟性は、男女に依つて如何に異なるかといふに、多血質と神經質とは、男よりも女に多く、膽液質と粘巴質とは女よりも男に多いやうである。獨逸で四十人の男女に就いて、調査した結果は次ぎの如くである。

稟性	男	女	男を百として女
多血質	一八	二八	一五五、六
神經質	五	七	一〇四、〇
膽液質	一二	三	二五、〇

これで見ると多血質は女の特性で、神經質は第二の特性とでも謂ふべきものである。それで此の二つのものに就いて、次ぎに説明するであらう。

第二項　多血質

多血質の人は、生理的には血液が多く、精神的には物事に感じ易くして、而かも其の反動は極めて急激である。けれども永續きのせぬ性分である。

俗に、怒つても跡のない人と謂ふのは、此の質の人で、其の來たるや風の如く、其の去るも亦風の如くである。それで多血質の缺點を擧げて見ると、輕卒に流るゝ嫌ひがある。其の性は活潑で、進取の氣象に富むけれども、志操は變動し易く、退いて守るよりも、進んで攻むる方が得意で、往々粗暴、匆急に流るゝことがある。

けれども多血質のものは、其の體格は健康で、强壯である、それで體格から言ふと、下女式の女、或ひは勞働女の類はこれで、彼の新らしい女とやらも、精神的では

この種類に屬するのである。

多血質の特徴は、次ぎの如くである。

一　身體は多く肥滿し、脂肪が多い。

二　顏面及び爪の色が赤く、皮膚も亦赤味を帶びて居る。

三　頸は太く短くある。

四　眼は突出するか、或ひは平たいけれども、窪めるものは無い。

五　毛髮は太くして、硬い。

六　鼻は扁たい。

七　口唇は厚い。

八　汗の出やうが多い。

九　手足は温かで、夜間寢つかれぬ樣なこともある。

神經質の人は、火の樣な性質で、多血質に似たところがあるけれども、其の感情から生ずる反動力は弱い。そこが其の異なるところである。例へば何かに激怒することがあつても、之れを直ちに、外面に現はしてガミガミする樣なことがなく、之れを心の裡に含んで、永く忘れないで居るといふ樣な質で、俗に之れを執念深いといつて居る。

斯くの如く怨みを忘れざると同樣に、人の怒を記して、永く心に留めて置くのも、此質の特性といふてよい。

尙、神經質の性質を言ふと、神經質の者は怜悧で、物事に注意することが深く、且つ思考力に富んで、想像力が強いので、文學や、技藝等に達する者が多い。概して感情は鋭敏であるけれども、決斷力は乏しくして、心情の變じ易いのは其の缺點である。

體格から言ふと、神經質の者は、決して强壯ではない。痩せて身體の細長きと、顏の蒼白きと、眼の窪めるとは、其の特徴である。之れを詳しく言ふと次ぎの如くである。

一　身體は一般に痩せて、稜々として骨のあらはるるものがある。さほどでなくとも、瘠せて居るので、姿はすらりとして美人の相を供へて居る。

二　肩は尖る。

三　顏は細長いものが多い。

四　顏は細長い。

五　眼は窪み、炯々として底光りを放つ。

六　鼻は鋭く、光る。

七　口唇は薄い。

八　手足の指趾は細く、少しの冷氣に觸れても、痳痺することが多い。

ざつと箇樣であるが、强い者は虛弱で、病的なることが多い。其の神經の薄弱なる人は、神經病、ヒステリー、神經衰弱等に罹り易く、又他の疾病からこれに變ずるこ

とも多くある。

以上多血質の女と、神經質の女と、其の容貌を比較して見ると、前者には圓顔が多い、後者には細顔の多いことは、前に言つた如くである、今、兩者の顔を極端に發展せしめて、其の止まつたところを見ると面白い。即ち多血質の圓顔を、最も圓顔の相にすると、おかめになるが、神經質の細顔をもつと引き締めて、十分に凄味を帶ばしむると、磐若の顔になる。おかめと磐若、面白い對照ではないか。

第三節　女らしい女

女らしい女とは、謂はゆる舊式の女、即はち、引つ込み思案の女のことである。舊式といふと誤弊があるが、日本固有の女で、つつましやかな優しい女であるから、床しいところがある。何事につけても遠慮で、羞恥むところが、今時の女では、似合はぬかも知れぬが、女としては寧しろ此の方が、床しいと吾人は思ふものである。

品位のある女といふのは、斯ふいふ種類の女で、唯だ無性に羞恥で、無性に遠慮する樣でも困るが、適度に羞恥で、適度に遠慮するのは、まことに床しいものである、今の人は之れを舊式の女だの、古風の女だのといふけれども、吾れ〳〵は愛らしい女として、新らしい女よりも、男らしい女よりも此の方の女を歡迎するのである。

第四節　男らしい男

男らしい女とは、男性的女子即ちヴイラジニタツトのことで、女子の精神的內容が、男性的に變化したものである。

それで之れを變性女子ともいふが、全く病的で、その性格のみならず、體格も男子に似て居る。即はち自分は女でありながら、男の氣分して他の女を愛するとか、男の趣味を有するとか、全く男性的なるのである。さういふ女の性慾は、矢張男性的で、男には愛情も、戀情もないかはりに、女に對しては頗る厚く、男に對しては羞恥の感情

がないけれども、女には羞恥むのである。

クラフト、エビング氏の示した例で、恁ふいふのがある。それは二十六歳の夫人で、數ヶ月前に結婚したが、夫婦的義務には服しても、同性に對する色慾があつた。彼の女は彼れ自身の、行爲の正しからざることを自覺して、之れを改めやうとしたが、何うしても改むることが出來なかつた。其の性格を箇條書きにすると、次ぎの如くであつた。

一　歩行は男に似て居る。
二　姿勢も男の樣。
三　顏面には強い線があらはれて、男の樣である。
四　音聲は渴つて太い。
五　骨格は強大。
六　筋肉は發達して男の樣。

七　脂肪組織は少ない。
八　骨盤は狹小。
九　酒は飲み、喫煙を好む。
十　衣服に嗜好を有たぬ。
十一　裁縫は拙劣。

嗤だ乳房は發達して、女性であるが、進んで男化といふのになると、乳房も男の樣になることがある。

第五節　虛榮の女と新らしい女

虛榮の女と、新らしい女とは、よく似て居る。そも〳〵虛榮とは、俗に見榮を飾るといふことで、一般に婦人は虛榮心に富んで居るものであるけれども、或る種の女は、特に此の心が强盛である。

虚榮心の根本は、利己心から來るものであつて、多く人の目につき、よく其の心に止まつて、他人よりも一層よく、人に認識せられんことを、要求する心、之れが即ち虚榮心である。

虚榮心にも種々あつて、精神界に屬するもの（例へば知識方面を誇らんとする類）もあるが、多くは物質的のもので、衣服や、裝飾に憂き身を窶すものが多い。かういふ種類のものは、經濟的問題からして、飛んだ不了見を起こして、墮落に陷つたり、法律上の罪人なつたりすることが多い。

體質の上からいふと、虚榮心の女は、多血質に屬するものに多い。

次ぎに新らしい女も、多血質の稟性を有するので、虚榮の女と、男性的女子とを、少しづゝ混じて居る。此れを言ひ換へると、虚榮心に富んだ、男性的の女といつた樣な性質のもので、これも慥かに變性的の女子である。或る新らしい女が、女郎屋に登樓して、娼妓を買つたとか、藝妓を聘げたとかいふ話もある。

第四章　女性の發情期

第一節　女性の發情期と年齢

發情期とは、好齢期に至つて、色情を發する時期の謂ひで、春機發動期とも、又は破瓜期ともいふ。

此の發情期は、幾歳で達するかといふに、人種、氣候、體質、習慣等に依つて一樣でないが、概して言ふと、寒國の人は、暖國の人よりも曉く、都會の人は、村落に住む人よりも早く、此の期に達することは、統計に示すところである。又、浮華、淫靡の巷等に從事するものの子女は、嚴格な家庭に育つものよりも、早く發情する傾きのあることも、事實の證するところである。

女子の發情期を表現するものは、月經の初潮である。之れを言ひ換へると、月經の

初潮は、即ち發情期の前驅で、發情期の次ぎに來るものは、身體の成熟である。それで普通に發情期は、

前期と後期

とに分かれ、前期は月經の初潮期で、後期は身體の成熟期となるのである。

前に言つた如く、發情期の初期は種々の事實に依つて多少の遲速は免れぬが、併し寒帶地方と、熱帶地方とを除く外は、略ぼ近くして、大差ないやうである、左表は世界の各地方に於ける、發情期の初期、即ち月經初潮期の平均である。

英吉利	十五年
佛都巴里	十五年二ケ月
伯林及びバイエルン	十五年九ケ月
墺都維納	十五年八ケ日
瑞典ストックホルム	十五年七ケ月

丁抹コッペンヘーゲン	十六年九ケ月

北米合衆國はこれより稍々早くて十四年五ケ月であるが、極端に早いのは、埃及の十年である、遲ひ方ではラプランドの十八年、エキスモーの二十年で、此れ等は世界中で、一番遲いのである。

第二節　發情期に於ける身體的變化

發情期の特徵は、前に一言せる如くであるが、此の時期に達すると、新陳代謝の機能が旺盛となつて、身體上に種々の變化がある。此の變化は要するに、兒童期から壯年期に入るの階梯で、生殖器の成熟を意味するものである。

先づ其の解剖的變化を記すと、次の如くである。

一　體重の增加すること

二　脂肪の增加すること。

三　頭髮の長くなること。
四　陰毛を生じ始むること。
五　臀部肥大すること。
六　乳房豐隆すること。
七　生殖器成熟すること。
八　腦量大となること。

等で、此れ等はみな、代謝機能の旺盛となれる結果である。次ぎに生理的變化では、

一　消化及び吸收作用盛んとなること。
二　排泄作用盛んとなること。
三　呼吸活潑にして、炭酸瓦斯の吐出量增加すること。
四　尿量多くなること。
五　脂肪線發達して、面部に面皰を生ずること。

六　體質烈しくなること。

等で、遺傳素質を有するものは、此の際現はれて、遺傳病に罹ることがある。

婦人の美しくなるのは、此の時期であるが、其の肌の美しくなるのは、皮下に脂肪の蓄積して、謂はゆる曲線美が發達する故である。乳房の膨むのは、乳線の充實するためで、臀部の肥大するのは、骨盤が擴大するからである。

今まで固く鎖閉し居つた花の蕾が、東風に暖を送られて、漸く綻び初めて、芳を競ひ、妍を爭ふやうになるのと、幼女の發情期に至るのとは啻だに形態のみでなく、其の意味に於いても同一である。肉色妖艶、嬌姿、艶麗、婀娜たる處女は、まこと男の目を惹くべく、蕾のヴェールを脱したやうなものである。

第三節　發情期に於ける精神的變化

身體上の變化ばかりでなく、精神上の變化にも、注意すべきものがある。一般に於

いて挙止動作は、すべて靜肅温和となり。羞恥心は發達して、周圍に心を使ふ樣になるのは、發情期の初めから、現はるゝところの現象である。小兒らしかつた態度の一變して、大人らしくなるのは、全く羞恥心から誘はるゝもので、羞恥心の發達は、婦人の發情期に於ける特徴である。

羞恥心は小兒でもある。彼の小兒が面識のない人に對する時に、自らはにかむのは是れであつて、羞恥心の萠芽と見るべきものであるけれども、發情期以前のものは、無意味のものであることを知らなくてはならぬ、何故といふに、此の時代に於ける羞恥心は、單に人に臆することから生ずるもので、外に意味はないからである。

然るに發情期に至ると、人を臆する外に性的觀念が加はつて、言語、動作共にしとやかになるのである。此の動作は男子は左程でないけれども、女子特に處女は著しくして、少しのことも恥かしがる樣になることが處女の處女たる所以で、羞恥心は婦人の美德と見てよからうと思ふ、尤も餘り羞恥心に富んでも困るが、適當にあるものは

奥床しいこと、前に言つた如くである。

第五章　月　經

第一節　月經とは何んなものか

月經とは、適當な發育を遂げた婦人が、毎月定期に血液を、膣口から排出する現象の謂ひである、此の現象は健全な婦人に於いては、正確であるけれども、不健康なものは不正確で、全く月經の無いものすらある。

箇樣に月經は、婦人の定期に出血するものであるけれども、膣口の出血には、病的なものもあつて、月經と誤まられることがある。それで月經の血液をば、經血、病的の血液をば、非血經と名づけて、此の兩者を區別するには、先づ發情期との關係

月經の徴候
月經の原因

等に就いて、詳知するところなくてはならぬ。

第二節　月經の徴候

月經には前兆がある。一體月經は、生理的現象で、病的ではないけれども、其の身心を刺戟することが頗る大なるので、往々にして、病的狀態となることがある。健全な女子でも、多少の影響は免れずして、月經の來る前日若しくは數日前からして、徴候がある。

其の徴候は、人に依つて一樣でないけれども、大要は次ぎの如くである。

一　下腹と、腰部とに、或ひは其の一部に一種の疼痛がある。

二　頭が重く、或ひは壓迫せらるゝ樣な感がし、頭痛又は眩暈を生ずることがあ

る。

三　皮膚に充血を來たし、多少發熱することがある。

四　脚が倦怠く、時としては全身に及ぶことがある。

五　食慾が不振となること多く、嘔吐を催すことがある。

六　呼吸數は稍々減じ、脈搏も少しく緩くなる。

七　睡眠は常よりも深くなる。

八　尿量は常よりも多くなり、隨つて放尿の度數も多くなる。

九　精神は不安となり、或ひは憂鬱となつて、怒り易く又喜び易くなる。

其の重いものはヒステリーの樣になる、輕いものでも免れずして、何事に對しても懶く、且つ其の心情の發動は、容易に容貌の上に現はれて、顏色の憔悴するに至るものが多い。

此の前兆に次いで、來たるものは、即ち經血の潮來で、其の期間は、通例三日乃

至四日で長いものになると、七日乃至十日に及び、短いものには、二日若しくは一日で、終るものもある。

經血の全量は、人種に依り、又人に依つて一樣でないけれども、普通は百グラム乃至二百グラムで日本量にすると五勺乃至一合である。

斯くの如く女子が、毎月多量の血液を失ふに關はらず、よく貧血にならないのは、何ういふ理由であるかといふに、亡血に對する女子の特別なる生理機能に因るもので、其の原因は次ぎの如くである。

一　亡血に對する抵抗力の强いこと

二　全體の血量は、男子よりも比較的に多いこと

三　血液の生成の速かなこと

若し女子に、右の特別なる性質がなかつたならば、忽ち貧血に陷つて、不測の害を招くや疑ひがない。そこで疾病其の他の原因で、月經が閉止することがあると、血液

が增多して、

鼻、口、或ひは肛門等より、出血するに至る。

ことがある。老年に至つて（四十才乃至五十才）自然に閉經した婦人が、肥滿して再び美しくなるのも、此の理である。

月經の量は、文明人と野蠻人とに依つて異なり、野蠻人の量は少く、且つ期間は短いけれども、文明人の月經は、一般に量多く、且つ長くある。

第三節　月經の順調と變調

月經に就いて注意すべきことは、其の定規性なることにある。此の時日は、卵巢が發育して、グラフヒー氏胞の破裂に基づくもので、普通は、

四週間毎に、一回來潮する

ものである。それで正當なる月經に於いて、假りに其の月の十日から始まり、而して

四日間に終はるものとすると、同じ月の十四日から起算して、翌月二十一日から再び來潮することが判明る、尤もその月の大小と、平年と潤年とに依つて、期日に少差はあるけれども、毎月二十八日をもつて、一循環するので、次回の月經を豫算することが容易である。

右の二十八日は陰暦の二十八日に當たつて、月經は滿月の前後に起こることが多いので、古昔は月經の原因をもつて、月の引力に歸した。けれどもそれは固より採るに足らぬ俗說である。

右の如く月經は、一定期に來るものであるから、其の來潮の規則的なるものは、生殖機能の完全なる證で、之れを順調といひ、不則なるものを變調と稱するのである。變調の原因に種々ある。隨つて其の狀態も一樣でないけれども、普通は次ぎの如くである。

一　有る月と、無い月とあるもの、即ち先月は無くて、今月はあつたといふ樣

なもの。

二　量の多い月と、少ない月とあるもの。

三　一日半日、若しくは數時間で、終はるもの。

四　之れに反して、七日或はそれ以上連續するもの。

五　一回若しくは數回あつたきりで、其の後の月無くなつたもの。

六　數月を隔てゝあつたり、或ひは數年置きにあつたりするもの。

大抵上記の樣なものは變調で、さういふものは生殖器に異常があるか、或ひは病氣があるのである。尤も血量の多いものと、其の持續期の永いものと、短いものとは、必らずしも病的ではないことがあるが、併し醫師の診斷を必要とする。

第四節　月經に關する古人の迷信及び觀念

古昔、婦人を汚れたものとして、神社、佛閣に入るを禁じ、又は靈山に登るを戒じ

て居たのは、其の月經のある爲めで、此の習慣が近年まで行はれて居たことは、人の知るところである。

歌羅巴でも、婦人を不淨として、之れを卑しんだことは、既に言つた如くで、希臘のプリニー氏の如きは、恁んなことを言つた。

月經は有毒で、其の氣に觸れたものは、草木、果實、穀物等の別なく、みな枯凋し、又、武器を鈍らし、鏡を曇らしむるのみならず、蜜蜂を殺し、犬を狂はしむ。

印度人が、月經を忌むことの甚はだしいことは、前に言つた如くで、月經は穢れの國に於いても、忌まれたのである。

けれども歴史上の事實に依ると、我が上古では、月經を、さほど不淨のものと、看做さざるが如くであつた。例へば日本武尊が、東夷征伐の砌り、尾張の國に入り給ひて、美夜受媛を寵し給ひける際、宴中で尊は、媛の意須比（被衣）の御裙に、さはりもの（月經のこと）の着きあるを見そなはして、斯くなん歌はれた。

ひさかたの、
天のかく山、
利鎌に、
さわたる材、
ひはほみ、
たわや腕を、
まかむとは、
吾れはされど、
されむとは、
吾れは思へど、
汝がけせる、
おすひの裾に、
月立ちにけり、

美夜受媛の答へは、恁うであつた。

高光る、
日の御子、
安見しに、
わが大君、

野たまの、
としがき經れば、
あらたまの、
月はき經ゆく、
うべならべな、
君待ちがたに、
わがけなせる、
おすひの裾に、
月たゝなむよ。

之れに由つて之れを考ふると、我が上代では、婦人の品位が高くして、尊敬を拂はれしと同時に、月經を不淨なものとは、思はなかつたのである、其の後世に至つて、女人禁制などの壓制の起こつたのは、儒教又は佛教の影響であることは明らかである。

第五節　月經の原因

月經の原因は、グラフヒー氏胞の破裂、即ち排卵にある事は、前にも述べた通りであるが、然し排卵の出血ばかりでは、未だ月經を起すに足らぬ譯であるのに、經血の多量なるは、如何なる理に依るかといふに、其れには二つの原因がある。即ち

一　喇叭管の分泌液
二　子宮粘膜の出血

之れである。左に之れを說述しやう。

卵巢が成熟して來れば、グラフヒー氏胞に、血液を流湊して、其腫脹を來し、遂に之れが破裂して、其の內容物をば排泄する時は、卵珠は喇叭管內の氈毛に依つて、子宮に送られ、此時に胞液、血液及び其他の分泌液も卵珠と共に子宮に送られて、腟口から出て了ふ。之れは經血の一部であつて、次ぎに來るものは子宮出血である。

子宮出血は、子宮の粘膜に分布してある小血管の破裂より來るものであつて、其の量は多い。初め子宮はグラフヒー氏胞と共に、粘膜充血して潮紅腫起し、且つ柔らかになつて、其上皮から先づ剝脫し、次いで其露出してゐる腺膜腺及び血管の破裂を起

すのである。けれども、此の一種の變化及び破裂といふ事は、粘膜の表層丈けの事で、其深層に變りはないから、月經の終了後には、再びこれから粘膜を生じて速かに舊に復するを得るのである。

斯くて、子宮に移された卵珠は、精子と會合して孕機を受くる時は姙卵となりて子宮に留まり、否らざる時は不妊卵となりて、子宮を辭するのであるが、子宮粘膜の出血は、此の卵珠と如何なる關係を有するかに就いて二說がある。即は

甲　プリユーゲル

乙　ライルルト、ゲギスモント

諸氏の說であつて、兩說は全々相反して居るから、左に其概要を說述する事とする。

甲說に曰ふには、子宮粘膜は卵巢發育の影響によつて、毎月期を定めて新陳交代するものであるが、舊粘膜にては卵巢より脫出して來る卵珠を養ふに適せないから、卵珠が來る前に破壞して、新粘膜を用意し、茲に卵珠を附着せしめて之を養ふといふ事

であるが。

乙說に依れば、子宮粘膜が充血して腫脹するのは畢竟孕姙せる卵珠の附着に供して、之れを養育せしむる爲であるから、卵珠が姙孕せずして、體外に排出する時は、充血したる子宮粘膜は、剝脫して出血を來すといふのである。

甲說では、月經は卵珠が子宮に來る前に出で、乙說の方では月經は卵珠が子宮を去りたる後に生ずるといふ說であるが、甲說は從來學者が一般に信じた處であつて、乙說は近來之れを信ずるものが多くなつて來た。

月經の原因に關して甲說の方が確かであるか、乙說の方が眞であるか、未だ學界で確定されてはないけれ共、要するに月經は卵珠の脫出を密接な關係ある事丈けに否まれない。

右の事實により、姙娠の起こる時期、即ち卵子が精子と會合して、孕機作用を受くる時期も、自ら二派に分かれて、甲派は姙娠は月經後に起こるといひ、乙派は月經前

に起こるといふに至つた。此の事實は後文姙娠の條に於て說く事としやう。

第六、月經の初潮

發情期に於て、月經が初めて到來するのを初潮といふ。此の時期は結婚敎育等の上に、大なる關係あつて、之れを定むる必要はあるけれ共、人種、氣候、風土、體質、習慣及び生活狀態等、種々の事情に支配されて各人一樣といふ譯に行かないから、廣く統計を取つて調査を精密にして、其上に初潮期を定めねばならない。斯ういふ樣にして初めて一國若しくは一地方に於ける初潮期を來り得るのである。

先づ英國の例にすれば、マンチエスター市の病院にて調査した統計は、四百五十人の女子にして、其中で最も早かつたのは十年、晩かつたのは二十年、最も多いのは十五年であつた。其平均は十五年二ケ月であつて、細別すれば左の通りである。

初潮期の年齡	人員	延べ年齡
十年	一〇	一〇〇
十二年	一九	二二八
十三年	五三	六八九
十四年	八五	一、一九〇
十五年	九七	一、四五五
十六年	七六	一、二一六
十七年	五七	九六九
十八年	二六	四六八
十九年	二三	四三七
二十年	一	九〇
總計	四五〇	六、八三一

即ち平均十五年二ケ月であるが、ホツク氏が倫敦に於いて一千九百九十八人の女子に就いて、調査したのは是れより稍々早い。

初潮期の年齡	人員	延べ年齡
九年	一	九
十年	六	六〇
十一年	五九	六四九

十二年	一四六	一、七五二	
十三年	二五三	三、二八九	
十四年	四三七	六、一一八	
十五年	五〇二	七、五三〇	
十六年	二七〇	四、三二〇	
十七年	一五七	二、六六九	
十八年	九七	一、七四六	
十九年	四五	八五五	
二十年	一九	三八〇	
二十一年	四	八四	
二十二年	一	二二	
三十年	一	三〇	
總計	一、九九八	二九、五一三	

此の平均は十四年八ケ月なれ共、此の内には例外と見做すべきものもある。即ち九年になる者と、三十年になる者とであるが、之れを除いても同年月となるのである。

月經と關係ある諸種の事情の中で、最も大なるものは人種の關係を除いて氣候と風土である。之れ氣候は身體の發育と、大なる關係あつて、一般に溫熱は發育を促が

し、生殖器の發育をも助くるけれども、寒冷は之れを妨ぐるが故である。

是れに由つて、暖國の人は初潮が早く至り、寒國の人は遲くして、熱帶地方にては大概八歳頃から初まるに反し、寒帶地方の人は二十歳前後に於て初めて潮來のするといふ事である。

一國一地方に於て、初潮期に遲速ある事は前述の通りであるから、勿論世界各國地に於て其間に多大の差違あるべき筈であるが、廣く各地方に於ける統計を取つて之れを比較して見たならば面白い事實を發見する事が出來るであらう。

初潮期の平均年齢

地名	
シエラレオン	十年
埃及	十年
カルカツタ	十二年六ケ月
マルセーユ	十二年十一ケ月
北米合衆國	十四年五ケ月
曾數	十四年八ケ月

巴里	十四年六ヶ月乃至十五年八ヶ月
マンチエスター	十五年二ヶ月
ストックホルム（瑞典）	十五年七ヶ月
伯林	十五年七ヶ月
維納	十五年八ヶ月
ハイエルン	十六年一ヶ月
ポーランド	十六年一ヶ月
コツペンヘーゲン（丁抹）	十六年九ヶ月
クリスチヤナ（諾威）	十六年十ヶ月
ラプランド（瑞典領）	十八年
エスキモー	二十年

右表の如く、月經の初潮に多大の差違あるのは、人種其他の關係はあるとしても、主原因の氣候にある事は、同じ歐洲にあつても、北方と南方とに依つて異なる事實に徴して知るを得べきである。

我邦にあつても月經の初潮は地方に依りて異なつて居る。九州は東北より早く、本州は北海道よりも早いは事實の證明する處である。

總體に於ては十四年五ヶ月乃至十四年九ヶ月であるが、其内譯を示せば次の通りである。

地方	調査者	調査人員	平均年齢
金澤	山田氏	三、九七八	十四年五ヶ月
東京	東京醫科大學	一、〇一五	十四年八ヶ月
大坂	諸方氏	一、八八七	十四年九ヶ月
總計及び平均		六、八八〇	十四年七ヶ月

即ち我國にては平均十四年七ヶ月にして、初めて初潮到たる譯である、之れを歐洲人に比すれば一般に早くして、獨逸人よりは一年、諾威人よりは二年三ヶ月早き譯である。

黄帝素問には女子二七にして天癸至るとあるが、之れに依れば、支那では我國より早い樣でもあるけれ共勿論確かとは見るを得ぬ。

次ぎに關係を有するのは、都鄙、教育、貧富等の生活狀態である。都會に住む者は村落に住む者より、月經の至る事は一般に早い、之れは都會地に於ける周圍の事情

は、村落に於けるよりも早く少女の春情を刺戟して之れを發動せしむるが故である。スキッツ氏は維納に住む女子と村落に住む女子とを比較して維納では平均十五年八ケ月にして初潮を見るのに村落にあつては、平均十六年二ケ月にして初めて至るを調査した。

貧富の關係は特に大であつて、富める者は早く、貧しいものは晩い事は都鄙の例に準じて居る。プリエール、ド、ボアモン氏の調査によれば、佛國に於ける下流社會の女子は平均十四年十ケ月であるのに、中流社會の女子は平均十四年五ケ月、上流社會の女子はもつと早くて十三年八ケ月が平均になつて居る。之を表で示せば

貧富	初潮の平均年齢
上流	十三年八ケ月
中流	十四年五ケ月
下流	十四年十ケ月

であつて、上流社會は下流社會より早い事一ケ年二ケ月である。

又營養の關係も少なくないもので、營養の佳良なるものは不良者なるものよりも早く、教育あるものはなきものよりも早く、品位の下劣なるものは、其の高尚な者より早く、例へば花都の街などに住むものは、然らざる場所に住むものより早い。之れは賤業の感化を受けて早く色情を多くするが故である。

右の如く種々の事情が錯綜して月經の遲速早晩の理由を作くるものであるが、人種の上から見た遲速は別として、何れにも破格の例のある事は免れない。我國にても早き者は九年十年にして已に至り、遲き者は二十一年にして通せる者もあり、英國でもホツグ氏の調査の通り、早い者は九年にして已に至り、遲いものは廿年三十年といふ例外のあつた事は前に記した如くである。

世には極めて破格な月經早通の實例もある。モーラン氏は一女性は生後四ケ月にして一女兒は九ケ月にして既に月經の通じたるを見たが、殊に後者の如きは其陰部に陰毛を生じ乳房も著しく發育してあつたといふ事である。レンホセヅク氏も一女兒が

生後九ヶ月にして月經を通じ、其滿二歳の時には殆んど十七八歳の女子と等しき發育を呈するを見たといふ。

此れ等の場合にあつては、人は普其姙娠機能の如何を疑ふであらうが、ワルダイエル氏其他の學者の說にあれば、斯かる小兒でも其卵珠は確かに生熟して生殖機能を有せるものゝ樣であつたといふ。

第七節　月經の終止

月經の終止、即ち生殖機能の終末を表はす時期も、初發期と同じく、人種、氣候生活狀態等によりて多少の差があつて、通例は四十歳乃至四十五歳なれども、時として三十歳以下、若しくは六十歳以上にして此の時期に達する者もある。英國の五十六人と、米國の七十七人とに於ける調査は次ぎの通りである。

終止の年齡

英國ホッグ氏調	百分比例	米國	百分比例
三十三歳	一、八		
三十四歳	一、八		
三十五歳	一、八		
三十七歳	一、八		
三十八歳	八、八		
四十歳	一七、五		
四十一歳	三、五		
四十二歳	一〇、五		
四十三歳	五、三		
四十四歳	—	一、三	
四十五歳	八、八	一、三	
四十六歳	五、三	三、九	
四十七歳	一五、八	五、二	
四十八歳	五、五	—	
四十九歳	五、三	五、二	
五十歳	三、五	一、三	
五十一歳	—	一三、〇	
五十二歳	—	九、一	
		三三、七	
		二、六	
		九、一	

五十三歳	三、五	二、九	
五十四歳	—	二、六	
五十七歳	—	一、三	
六十歳	—	二、六	
七十歳	—	一、三	
總計人員	五十六人	七十七人	
平均年齢	四十三年二ヶ月	四十九年一ヶ月	

即ち英國にては平均四十三年二ヶ月にて終結を來たし、米國にては是より後るゝ事約六年にして終止期となるのである。此の中、英國の二十三と米國の七十年及び六十年を破格となし、之を除いたものを平均する事になれば、次ぎの如くになるのである。

英國　四十三年五ヶ月
米國　四十八年六ヶ月

同じ人種にして斯かる差異を生ずるのは、全く氣候、風土の然らしむる處といふべ

きである。

終結と都鄙との關係に於ては、エヴエル氏の調査がある。氏は百二十四人の女子について次の成績を得た。

月經の終止せる年齢	百分比例 都市	百分比例 村落
三十七歳	〇、六	—
三十八歳	—	〇、八
三十九歳	—	—
四十歳	一、六	一、六
四十一歳	—	〇、八
四十二歳	〇、八	—
四十三歳	一、六	二、四
四十四歳	一、六	二、四
四十五歳	九、八	一、六
四十六歳	八、一	一、六
四十七歳	三、二	一、六
四十八歳	八、九	二、四

四十九歳	九、八	五、七
五十歳	一三、〇	四、一
五十一歳	一、六	一、六
五十二歳	二、四	〇、八
五十三歳	二、四	一、六
五十四歳	四、一	〇、八
五十五歳	〇、八	
總計人員	八十七人	三十七人
平均年齢	四十八年	四十七年二ヶ月

前條ホッグ氏の、二十三才にして終結に達したる者は破格の例であつて、ホッグ氏の六十才二人と、七十才一人との三例も破格な者である事が勿論である。

然し乍ら生殖器、其他身體に異常なくして斯の如きに至つたならば差支はないけれ共、若し病的にして斯樣な風になつたならば、醫師に診察を請はねばならない。何となれば、終經の若きに現はれるのは、生殖器の障害に原因する事多いからである。

又、終經後屢々病的出血を起こして、月經と誤まらるゝ事もある。六十才以後の月

經には病的のものが多い。

終りに、月經についての格段なる例外、即ち生涯の中一回も月經を見たる事なき婦人のある事を注意して置かねばならぬ。

萎黄病に罹れる女子は月經の不通を來たす事はあるが、病的原因の外にも、其事實は極めて稀れに發見せらるゝのである。即はちカスペル氏は其著書に於て、三十三才の强壯なる一農婦が、嘗つて一度も月經なくして三子を擧げたる事を記し、リョウウキー氏は六子を設けたるも未だ一回の月經を見なかつた三十一才の健康なる一婦人あつた事を報告した。但し後の夫人は、第六回目の分娩後、始めて月經を見、以來整然として此れを存したといふ事である。

斯の如き無經の場合に於ける女子の姙娠横能は、有經の女子の夫れと如何樣に異つて居るかを攻究するは頗る趣味ある問題といはねばならぬ。

第八節　月經と精神並びに其の生理作用

月經に前兆ある事は、既に述べた通りであるが、通經を見るに至つて却つて氣の晴れたる如く平常に復するものあり、或は前兆に引き續きて愈々不快加はり、殆んど病的狀態となる者もあるが、そは各人各種の性質によるものであつて、元より一樣に云ふ樣は出來ないけれ共一般に月經中は神經系統亢奮して、身體に異常を覺ゆるは生理上免れぬ事であつて、其狀態は人によつて强弱の差あるのみである。

月經は發情期の特徵なりとしても、此時期に於ける色情如何といふに、月經中は大概色情は沈靜して、交媾を嫌ふのが常である、之れ月經中の交媾は害があるから、自然は之れを防ぐ爲めに、月經後に於て色情を亢奮せしめ、歡を合する事も此の時期に多いやうにしてある。

月經中に於ける交媾の有害な事は、永遠に閉經を來すものであつて、昔は月經中に

孕みたる子は病弱畸形なりと言つた。猶太では月經中に交媾するものは、男女ともに其種族から絕たれたといふは、此不結果を防ぐ爲であつた事は明らかである。

女子が時に憂鬱して謂はれなく憂ひ悲しみ、或はさしたる理由もなきに喜び、喜んだと思へば悲しみ、忽ち憤怒となり、憂苦と轉ずる樣に、心が其常軌を逸する事の多いのは、月經のなさしむる爲であつて、其刺戟が一層大なる時は、遂に狂亂して夢中となる事がある。

女子の嫉妬、自殺若しくは犯罪等に關する出來事は、斯かる時に最も多く、甚だしきは夢によつて其心を痛め、或は迷ふ者さへある。

女子の犯罪は月經時に多きは事實にして、之に次ぐは其前後なる事は特に注意す可き處であると思ふ。女の萬引として時々新聞に出づる者の中には純然たる窃盜もあれど、謂はゆる出來心なるものゝ中には月經の影響を受けて居るものが多い。

第九節　性交後に於ける女性の生物學的反應

獨逸の有名なる學者アブデルハルテン氏が、一種の姙娠診斷法を發見せる後、千九百十四年十月ウインの學者、ワルドスタイン及びエークレルの兩氏が、動物試驗上一回の交接にても、女子の血液中に男子の精蟲に對する特殊の酸酵素が生じて、一種の生物學的反應の起ることを發見した、此新事實は今迄世人の考へを根本的に改めて、曾に一回の交接によつても、男女間に肉體的關係の明らかに成立する事を、科學的に證據立てる事が出來る、故に一回の交接と雖も決して輕々に見過すべきものではない。

實に此の交接後の反應に關する醫學上の新發見は、獨り學問上ばかりで無く、人生の道德に對して好個の敎訓を與ふるものである。

交接後女性の血液内に現はるゝ、特殊酸酵素の形成、即ち交接後の反應に關する

發見は、既に述べた通りアブデルハルテン氏の、發見したる姙娠診斷法に基いたものである、即ち女子の姙娠するや、胎兒の小部分と見做すべき、胎盤絨毛の細胞が、母體の血液の中に入るが爲めに、其の蛋白成分に對する、特殊の防禦性酸酵素が、母體内に形成せらるゝものである。故に今姙婦の血清を取りて、胎盤越幾斯に加ふるならば、其血清に存する酸酵素から之を分解する故に、「ニンヒドリン」を用ひて檢査すれば其際青色の反應を呈する、此反應を呈する此反應をアブデルハルテン氏反應と云ふのである。

此反應に基きて、交接後精蟲に對する酸酵素が、女子の血液中に發現することを發見したものが即ちワルドスタイン、エークレル氏の兩氏である。

抑も、交接に由て女子の内部生殖器内に、射出せられたる無數の精蟲が、如何なる運命を取るやと云ふに、之れには種々なる說がある、動物に就いて試驗せる所に依るに、モルモットに於ては、交接後子宮孔は腟内に射出せられた、攝護腺液より成る栓

第一節　概　說

女子の生殖器は、外生殖器と內生殖器と分かるゝ事、男子の如くであるが、此區別は乳房を除く外は生理的作用と一致して、男子の如く混同する事はない、即ち外生殖器は外部に位して專ら交媾の用をなし、內生殖器は內部に位して、主に蓄殖の用を爲すが如く、其間に判然とした區別がある。

女子の外生殖器に屬するものは、大陰唇、小陰唇、陰核、前庭、バルトリン氏腺、陰阜、會陰及び乳房であつて、內生殖器は卵巢、副卵巢、喇叭管及び子宮より成つて居る、これにより外生殖器は即ち交媾器にして、內生殖器は蓄殖器なる事が解るけれども、乳房のみ外生殖器にして、然かも胸壁に位し、蓄殖の用を作して居る事は前に述べた通りである。

蓄殖器と交媾器とは解剖的區分と一致する事は前にも述べた通りであるが、今各部

分の要點を記して、之れを男子の生殖器と比較すれば、次の如くなるのである。

第一　蓄殖器

一　卵巢、卵珠を生ずる一對の腺にして、男子の精巢に相當する。

二　副卵巢、翼狀靱帶の側部に存する腺にして、左右二個ある。

三　附屬卵巢、翼狀靱帶の內部に位する腺にして、左右二個ある。

四　喇叭管、卵珠を子宮に輸送する一對の管にして、其作用は輸精管と同じである、されど其基因は違ふ。

五　子宮、胚の發育をとる一個の囊狀體にして、男子の攝護腺に相當する。

第二　交媾器

一　大陰唇、一對の皺壁にして、男子の陰囊に相當する。

二　小陰唇、大陰唇の內部に存する一對の小皺壁にして男子の尿道に相當する。

三　陰孔、小陰唇の上部にある一個の小突起にして男子の陰莖に相當する。

塊にて閉塞せられ、一旦子宮内に入りたる精蟲の逃出を防ぐものであるが、一定時間を經たる後、此栓塊は軟化して脱落し、之れが爲めに精蟲は子宮孔より出でゝ消失するものであるとは、ソボタ氏の唱ふる所であるが、併しユーアルツゲー氏は精蟲を子宮上皮内に、又コスター氏は膣上皮内に認めざりしと報じて居る、之れ恐らくは精蟲の一部分は、此れ等の細胞内に進入して遂に消失するものであらう、又ケーニツヒスタイン氏は、白血球内に精蟲の遺物を見たと稱したが是れは精蟲の一部分が白血球内に吸收されたものであらう、併し此の如き方法に由つて精蟲は消失するは、僅かに其の一部分に過ぎないので、他の大部分、子宮乃至輸卵管の粘膜より直ちに血管内に進入すべきことは、ワルドスタイン及びエークレル兩氏の試驗に徴して推測する事が出來る、即ち動物の交接後、數時間遲きも二十四時間の後には、雌體の血液中には精蟲に對する特殊の防禦酸酵素の現出する試驗成績より之れを觀れば、女性の生殖器機關内に射出されたる精蟲が、直ちに血管内に移行進入する事を考へ得られる。

是れに依りて見る時は、假令一回の交接たりとも、直ちに男子の生殖素が、女子の血液中に進入して、之に對する特殊の化學的物質を形成せしめ、其の間に離るべからざる肉的關係の成立し得ること明かである、而して此物質形成は女性の體内に於てのみ成立するものであるから、女性の愈々被動的のものなること之によりて一層明白となつた次第である、又女子が始めて異性の肉に接したる後、其の精神上に變化を來すことは、從來人の唱ふる所であつて、之れも亦男性成分の作用に由つて精神方面にも影響を受けたる結果である。

如斯、女子は只一回の交接に依つても、動かすべからざる肉體的影響を生ずるを以て、女性は其の貞操を嚴守せざるべからざる必要が自から生じ、又男子は之に對して充分の責任を持たねばならぬ譯である。

第六章　女性の生殖器

第一節　概　說

女子の生殖器は、外生殖器と內生殖器と分かるゝ事、男子の如くであるが、此區別は乳房を除く外は生理的作用と一致して、男子の如く混同する事はない、即ち外生殖器は外部に位して專ら交媾の用をなし、內生殖器は內部に位して、主に蓄殖の用を爲すが如く、其間に判然とした區別がある。

女子の外生殖器に屬するものは、大陰唇、小陰唇、陰核、前庭、バルトリン氏腺、陰阜、會陰及び乳房であつて、內生殖器は卵巢、副卵巢、喇叭管及び子宮より成つて居る、これにより外生殖器は即ち交媾器にして、內生殖器は蓄殖器なる事が解るけれども、乳房のみ外生殖器にして、然かも胸壁に位し、蓄殖の用を作して居る事は前に述べた通りである。

蓄殖器と交媾器とは解剖的區分と一致する事は前にも述べた通りであるが、今各部

分の要點を記して、之れを男子の生殖器と比較すれば、次の如くなるのである。

第一　蓄殖器

一　卵巢、卵珠を生ずる一對の腺にして、男子の精巢に相當する。

二　副卵巢、翼狀靭帶の側部に存する腺にして、左右二個ある。

三　附屬卵巢、翼狀靭帶の內部に位する腺にして、左右二個ある。

四　喇叭管、卵珠を子宮に輸送する一對の管にして、其作用は輸精管と同じである、されど其基因は違ふ。

五　子宮、胚の發育をとる一個の囊狀體にして、男子の攝護腺に相當する。

第二　交媾器

一　大陰唇、一對の皺壁にして、男子の陰囊に相當する。

二　小陰唇、大陰唇の內部に存する一對の小皺壁にして男子の尿道に相當する。

三　腟孔、小陰唇の上部にある一個の小突起にして男子の陰莖に相當する。

四　前庭、膣の上部にして、左右小陰唇の間にある。

五　バルトリン氏腺、一對の腺にして膣の上部にあり、其作用は男子のコーペル氏腺と同じである。

六　膣、子宮と陰門との間の通路にして、交媾の際は陰莖を受容し、分娩の時は産道となる。

七　陰阜、大陰唇の上部にして、陰毛を生ず。

膣は男子の陰莖に相當するものにして、大小陰唇、陰核、バルトリン氏腺等は之れを助けて淫情を盛にする事陰囊、攝護腺、コーペル氏腺、射精管などの樣なものである、凡べて交媾器は直接の蕃殖には與らぬけれども、間接には大なる關係あつて、其形狀大小等は畢竟蕃殖を遂ぐるに適當なものである。

第二節　卵巣

卵巣は外面凸凹多き囊狀體にして、骨盤の內側に相對在し、子宮底に接して喇叭管の外端に面して、廣靭帶の皺壁の內にある。故に卵巣は子宮と喇叭管との間に位して居るもので、其內端は卵巣靭帶といふ靭帶で子宮の後部と連結し、外端は前絲に依つて、喇叭管に接する事、丁度紐の兩端で、子宮と喇叭管とを結びつけて居る樣なものである、卵巣に血管の進入する部分を卵巣門と名づくる。

其形は卵圓形で扁たく、大さは鷄の卵位、即はち長さは約四センチメートル、幅は二センチメートル、厚さは一、三センチメートル、重さは六グラムあつて、之れを精巣に比すれば、稍小にして、色は淡紅色である。

卵巣は厚き膜にて包まれ、內部に腺質と隨質とある。此膜は强固な結組織で縱橫に走れる數層の纖維より成つて居る、此れは卵巣の一番に緊要な卵珠を生ずる處であつて、卵巣基質と稱してある。隨質は腺質の內部にあつて數多の彎曲した血管で或り立ち、其間に筋纖維を含有して、血管と結合して居る。

四　前庭、腟の上部にして、左右小陰唇の間にある。

五　バルトリン氏腺、一對の腺にして腟の上部にあり、其作用は男子のコーペル氏腺と同じである。

六　腟、子宮と陰門との間の通路にして、交媾の際は陰莖を受容し、分娩の時は產道となる。

七　陰阜、大陰唇の上部にして、陰毛を生ず。

腟は男子の陰莖に相當するものにして、大小陰唇、陰核、バルトリン氏腺等は之れを助けて淫情を盛にする事陰裏、攝護腺、コーペル氏腺、射精管などの樣なものである、凡べて交媾器は直接の蕃殖には與らぬけれども、間接には大なる關係あつて、其形狀大小等は畢竟蕃殖を遂ぐるに適當なものである。

第二節　卵巢

卵巢は外面凸凹多き楕狀體にして、骨盤の內側に相對在し、子宮底に接して喇叭管の外端に面して、廣靱帶の皺壁の內にある。故に卵巢は子宮と喇叭管との間に位して居るもので、其內端は卵巢靱帶といふ靱帶で子宮の後部と連結し、外端は前綵に依つて、喇叭管に接する事、丁度紐の兩端で、子宮と喇叭管とを結びつけて居る樣なものである、卵巢に血管の進入する部分を卵巢門と名づくる。

其形は卵圓形で扁たく、大さは鷄の卵位、即はち長さは約四センチメートル、幅は二二センチメートル、厚さは一、三センチメートル、重さは六グラムあつて、之れを精巢に比すれば、稍小にして、色は淡紅色である。

卵巢は厚き膜にて包まれ、內部に腺質と隨質とある。此膜は强固な結組織で縱橫に走れる數層の纖維より成つて居る、此れは卵巢の一番に緊要な卵珠を生ずる處であつて、卵巢基質と稱してある。隨質は腺質の內部にあつて數多の彎曲した血管で或り立ち、其間に筋纖維を含有して、血管と結合して居る。

腺質の球狀胞は濾胞と名づけ、其内に各一個の卵細胞を含む。濾胞は概ね微小なるもので、顯微鏡を藉に非れば、視る事は出來ぬけれ共、發育するに從つて、漸々大となりて表都にすゝみ、直徑〇、五乃至一、二センチメートルの大さに達する。斯の如く發育した濾胞を特にグラフヒー氏胞と名づくる。

グラフヒー氏胞の數は普通三十個であるけれども、他の微小にして肉眼にて認知せられざるもの三萬六千と稱せられて居る、卵巣の外面に凹凸の多いのは、數多のグラフヒー氏胞が表面近くに位して居るからである。

卵巣の血管は内精系動脈及び子宮動脈の分派にして、卵巣門より隨質中に入り、迂曲したる經過をとり、皮質に達し、毛細管となりて卵巣を養ひたる後、之れを靜脈のもである。

グラフヒー氏胞を實驗するには、鼠か猫を解剖して、其卵巣を檢すればよい、此れ等動類の卵巣は、人の卵巣と同じ形であつて、位置も亦異つてゐないから、容易に認

知する事が出來る。解剖して見れば其内に數多の小胞を發見するであらう。之れ即ちグラフヒー氏胞であつて、顯微鏡に照して見る時は、胞膜、胞液及び卵細胞の三部より成るを知り得るのである。

胞膜はグラフヒー氏胞を包める結組織の膜であつて血管に富み、内層は薄くして胞液を包んで居る。外層を外胞膜と云ひ、内層を内胞膜といふのである、更に内胞膜の内面は上皮を被りて顆粒狀を呈し、其一部は次第に發育增厚して、其の内に卵細胞を包んで來る。此部を胞丘と名づけ、其上皮を顆粒膜といふものであるから、胞膜は内外胞膜及び顆粒膜の三部から成り立つて居るを認るのである。

胞液は卵の内部に充滿する透明の液にして、蛋白質を含み、卵細胞の營養を資くる。卵細胞が成熟に近づけば、胞液は增加して緊張し、遂に外胞膜の血液の循環を妨ぐるに至るから、之れが爲めに外胞膜は營養を失ひ、漸漸薄弱になつて終に破裂し、其彈力で卵細胞を卵巣外に壓出するのである。

卵細胞は外胞膜の顆粒膜中に包藏する細胞にして、卵巣が生殖器中に重きを置かれてゐるのは、卵珠を生ずる爲めであつて、精巣が精子を製造すると同じ理屈である。其の數はグラフヒー氏胞一個毎に一個宛あつて、其大さは針の頭位、初めは胞の下部に居るけれども、成熟すれば、胞内に充血して卵珠を胞の上部に押し擧ぐる樣になる。

卵巣の外面には黄褐色の瘢痕を認める事が多い、黄體といふのは之れであつて、卵珠が脱出した痕跡である。其理由を説明して見るに、卵巣は成熟せる時は、次に述ぶる方法に從つて、グラフヒー氏胞の破裂に依りて、中なる卵珠を排泄する爲めに、其の局部は收縮癒治して、瘢痕を生じて、内面は窪み、外面稍々高まつて居る。

黄體の黑褐色を呈して居るのは血液中のヘマトイジンと稱する物質の沈澱によるので、其數は通常七八個であるけれ共、時には一個或は全く無い時もあり、又、其現出する時期も一樣でなく、數年存して居るものと、數ケ月にして消滅してしまふのとある、其遲速は卵巣の生活力の關係するもので、機能が活潑な卵巣にあつては、黄體の消滅が早いけれ共、機能の衰へたものにあつては消滅が遲い。故に老いたる卵巣には、黄體が永存して卵巣の全面悉く黄體にて蔽はるゝ事すらある。

昔時は黄體を以て姙娠と關係あるものとなし、其數を以て姙娠の月數を卜せし事もあつたが、要するに此説は誤謬であつて、採るに足らぬと勿論である、何となれば黄體は卵珠の排出したる痕跡を示すに止まり、姙娠とは何の關係もないからである。

斯の如く、黄體と姙娠とは無關係であるけれ共、若し假りに古人の想像の如きものとすれば、純潔なる處女か貞節なる妻が不義の汚名を被むる事も多いであらう。何となれば、女子は既婚と未婚とを問はず月經毎に卵珠を排出するによつて、概ね若干の黄體を有して居る筈であるからである。例へば茲に初婚の婦人があつて、暴戾なる夫の爲めに虐殺されたとする。然るに加害者は殺害の原因を以つて、純潔ならざる妻に欺かれたるが故と陳述したなら、被害者は果して處女なりしや否の疑が當然起つて

来なければならぬ道理である、其處で裁判上解剖の結果、黄體を發見して被害者は純潔にあらずして、嘗つて人の母となりたる事ありとの鑑定の下に、加害者は利益を見るに反し、死者の被むる汚名は長へに消ゆる時はないであらう。昔歐洲の裁判醫學には是れに似た事件が多かつたと聞いた。

上に述べた通り、卵巣は、グラフヒー氏胞の破裂する毎に、瘢痕を生ずるものであるから、黄體は毎月一個宛生ずる理で、黄體の數は月經の毎數と等しく年月を經るに從ひ、漸々增加す可き筈であるけれ共、實際は然らずして、其數の概ね僅少なのは、老いたる卵巣を除くの外は、時日の經過と伴つて、漸々消滅するからである。

卵巣は卵珠を生じて生殖の作用を營む事、尙精巣の精子を生じて蕃殖を圖る樣なものであるが、此の二つの者は、作用のみならず、其成立も同一であつて、原は胚種腺より發育したものである事は前に述べた通りであるが、卵巣の卵珠を生ずる方法も亦精巣の精子を生ずる方法と同一であるけれども、蕃殖には、必ず兩生殖細胞の會

合を要するが故に、獨立の不可能である事も、兩者相等のいのである。

是れに由り卵巣の卵珠を生ずるは、男性の精子に促さるゝ說が古から信じられて居た。言ひ換ふれば卵珠は交媾の結果に生ずるものであつて、未婚の女子に生ずる事なしといふ事で、愚にも附かぬ妄說であるけれども、古は一般に早婚が行はれて、月經は交媾に促されて、生ずる親があつたから、斯くは信ぜられたものと思はれる。

卵珠は交媾と關係なくして生ずるもので成熟した女子は、結婚したと否とに關せず、卵珠は毎月定期に發生して、排出する事前に述べた通りである。

斯の如く卵珠は、交媾と關係なく生ずるけれ共、卵珠の成熟即はち卵巣の發育と色情とは大なる關係があつて、色情は卵巣の發育に促さるゝ事、尙男子の色情が、精巣に促さるゝが如くである。故に外傷にて卵巣を毀損し、又は疾病（卵巣炎等の如き）にて、之れを切斷する等の事ある時は、啻に生殖機能の廢絕を來すのみならず、色情を滅却して女子たるの資格を失ふに至るのである。

何故に卵巣と色情とが離れない關係を有するかといふに、精巣の內分泌作用と同じく、卵巣から卵珠以外に、或に物質を分泌して、之を血中に致し、其循環によりて腦を刺戟するが故である。卵巣を去れば色情を失ふ外に女子の性格を滅して髮髯を生じ、音聲まで濁りて太とくなる等、諸種の點が男生化する事、恰も精巣を去つた男子が女性化すると同じ事である。

卵巣が色情の源であつて、或る時期に達すれば卵珠を排出して、月經を促す等の事項は月經の條に審である。

第三節　喇叭管

喇叭管は卵巣より排出せらるゝ卵珠を、子宮に輸送する一對の管にして、子宮底の兩側から卵巣に亘つて兩者を結合して居る。

喇叭管の長さは十センチメートルを普通としてあるが、時として十二乃至三四十セ

ンチメートルに達するのもあり、或は短かきに過ぎて、卵巣に達せぬものもある。此種のものは、其卵珠が腹腔に落ちて子宮外姙娠を起す事がある。

管の子宮に接する部分は細くして狹ひけれ共、外方に至るに從つて漸々太くなり、其卵巣に面せる部分は廣くして壺の如き狀をなし、其周圍に指狀の凸起が生じてゐる。是れ謂はゆる煎絲にして、其壺の如き處を壺腹と名づくる。煎絲の中の一毛の特に長くして、卵巣を連れるものを卵巣煎絲といふ。

喇叭管の名は、其形に因めるものであつて、其作用は輸精管と同一であるけれ共、喇叭管の外端は、腹腔に開いて、輸精管の如く、直接に生殖腺と連結せざる處を異つた點とする。

喇叭管の周壁は三層に分かれ、外層は漿液膜にして、縱走及び斜走の平滑筋纖維より成つて居り、內層は粘膜にして數多の縱走皺壁を形成して居る。喇叭管を橫斷すれば明らかに其外方から內方に向つて突出せる狀を知るを得るであらう。

兩喇叭管の特異な性質は粘膜の構造にある。其粘膜は上皮、固有膜、粘膜筋及び粘膜下膜の數層より成り、上皮には氈毛がある。此の氈毛は喇叭管の外方より子宮に向ひて斷えず其方向に振動するのみならず、管も亦振動をなして、外方から內方へと收縮するが故に、卵巣より壺腹に入りたる卵種は、外方より徐々に內方に輸送せられて子宮に達する事を得る樣になつて居る。

喇叭管の作用は、卵珠を子宮に輸送するにある事は前述の如くであるが、此際に壺腹は充血して、卵巣に密接して來るが故に、よく其卵珠を捕捉する事を得るのである。又喇叭管の外端は腹腔に開いて居るを以つて、其外口より入り來る液、若しくは其分泌液を排泄して疾病を防ぐ事も確かに其任務であると見ねばならない。若し喇叭管が閉塞すれば、卵珠の通路を絶ちて不姙となる許りか、火炎症を起して、卵巣炎、子宮炎を續發する事のあるのも之れが爲である。

喇叭管は子宮と同じく刺戟を受くる事多きが故に、交媾が過度になれば、衰弱して

其輸送力を失つて了ひ、或は機能衰へて其作用を營み兼ねる事もある。

喇叭管の遺閉塞して、疾病に陷りたる時は其の原因に從ひ之れを療治せねばならぬ。

又喇叭管は痳疾の爲めに屢々淫侵され、膿瘍を來して通路を閉鎖さるゝ事が多い、診斷には細小なる探膿針を膣內より通して、喇叭管より膿を吹引するのであるが、勿論これは醫師の手術に待たねばならない。

第四節　子　宮

子宮は左右喇叭管の聯合する結び目にありて、喇叭管の下部の濶くなれるものと看做す可きものである。小骨盤內に於て、前面に位する膀胱と、後面なる直腸との間に介在し、其形は略平たき壺を倒にした樣である。上方は廣く下方は狹くして少しく屈曲し、凸部は後ろに向つて居る。

子宮の大さは、人に依りて異なり、形も處女と經姙婦とによりて差がある。處女に

於いては大凡、長さは二寸二分、直徑は上部一寸三分、下部八分、厚さは八分八厘にして、經産婦の子宮は圓く且つ大である。

子宮を外部より見る時は、膣と合したる、一機關の如くなれども、之れを切り開きて觀察する時は、明らかに兩者の區別並びに其の内景を知る事を得る。其處で子宮を分ちて、

子宮底　上部の廣くしてやゝ鈍圓なるところ、

子宮體　底と頸の間、

子宮頸　下部の狹くして膣に突出せる部分

の三部となし、其内部に通ずる孔を子宮腔と稱するのである。

子宮底は上方の廣きところにして、稍々前に傾き、其兩側の上端は喇叭管と通じ、下部は卵巣靱帶と接して居る。喇叭管は子宮腔と開通して居るが、卵巣靱帶は卵巣を支持するのみであつて、子宮の周壁と接して居る。

尙喇叭靱帶の下に左右各一條の强靱なる圓き紐様のものがある、是れ圓靱帶又は子宮靱帶と稱するものであつて、少しく彎曲し、其の下端は耻骨に固着して居る。長さは約四寸四分位で、子宮を支持する用をなすのである。

子宮體は底より頸に至る間の稱で、左右に濶き靱帶があつて强靱なる膜である。濶靱體と名付ける、上は底より下は頸に至るまでの全體の長さに擴まつて、其中に圓靱帶、卵巣、卵巣靱帶及び、喇叭管を包んで居る。濶靱帶は尾骶骨の兩側に固着して、圓靱帶と共に子宮を保持するものである。

此外に子宮を膀胱と直腸とに聯結せしむる二種の靱體がある。其の前面にある者を前靱帶といひ、後面にあるのを後靱帶といふ。前靱帶は子宮を膀胱と、後靱帶は子宮を直腸と聯結せしむる用を爲すのである。

若し疾病に依りて、以上の諸靱帶が衰弱する時は、靱帶に弛みを來して子宮が墜落する樣な事がある。之れを子宮脱、若しくは子宮弛垂と名付く。